

長生きなんてするもんじゃあないゾン

——『平成の長屋』騒動記——

鈴木史朗

A N N テレビ朝日系列で放送のテレビ番組『暴れん坊将軍』は人気時代劇として高い地位を確立することに成功した。

しかし時代劇の人気番組として王座を守っているのは何と言ってもT B S系列で放送の『水戸黄門』といえよう。

その『暴れん坊将軍』『水戸黄門』ともに番組の中では常に「長屋」が登場し貧しいながらもお人好しの住人が暮らしている表情が活き活きと描き出されている。

主役の暴れん坊将軍や黄門様よりも時には脇役として活躍をしていることは番組の人気を大きく盛り上げている原動力ともいえよう。

ところでどうして江戸時代の庶民はたとえ貧しくてもそれほどまでに朗らかに生活できたのだ

ろうか？

納めたハズの年金の受給権者が分からないといった「宙に浮いた年金問題」に頭をかかえている現代人と違い、江戸時代の長屋には悩み事など一切生じないような暮らしぶりが示されている。

つまり江戸時代の庶民とは現代人よりもズ〜とズ〜と幸せな生活を送っていたと考えるのは考えすぎなのだろうか？

文明の進化した現代社会の中にそのような日常の悩み事など存在せず幸せに暮らせる場所があったのならたとえ『長屋』でもよいからそのような施設で一度生活がしてみたいとの願望を持つあなた――。

今、日本全国いたるところでそのような『平成の長屋』の建設整備が進められていることをご存知だろうか？

エッそんな施設がどこにあるの？ 少なくともウチの近くではそのような『平成の長屋』計画の建設整備は聞いたこともないし、見たこともない――と初耳の方が多いかもしれない。

ところがどっこい『平成の長屋』とは特別養護老人ホームなどと呼称されてどんと建設整備されているのである。

「何だ『平成の長屋』って特別養護老人ホームのことだったのか。特別養護老人ホームだったらウチの近くでも、この間まで空き地だったところで建設が始まったよ」と納得していただけるのではないのでしょうか？

特別養護老人ホームでは、江戸時代の長屋でその日暮らしを楽しむ熊さんや八つつあんのようにはゆかないかもしれないものの、実に多くの人生模様もようが展開されております。

どうか今日一日だけでも日常生活の悩みから解放されたいあなた――。どうか時間をつくって近くにある特別養護老人ホームを訪問してみてください。

そこでは「日本は本当に高齢化社会に突入したのだなあ！」といった実態を目の前にされるだけでなく、たとえば見ず知らずの訪問者であつても「大歓迎」され、あなた自身「生きている実感」を味わうこととなり、新しい大きな発見があることでしょう。

それでは今から忙しいあなたも『平成の長屋』ともいべき特別養護老人ホームを訪問してみてください。さあどうぞどうぞ。

ようこそ特別養護老人ホームをご訪問くださいませ誠にありがとうございます。

特別養護老人ホーム『西とりの舎』の住人の一人である小木曾鉄平おぎそてつぺいは年齢九十三歳になるというから年齢から逆算すると、この世に生を受けたのは大正三年ということになる。

『西とりの舎』の住人の中にはまだまだ鉄平よりも年よりも目立つが、年上の入居者は女性ばかりで、男性としては小木曾鉄平は年長者に数えられている。

目下のところは「あと何年すると百歳になるのだろうか？」と指折り数えることの多くなった鉄

平の平成の長屋暮らしである。

ところで小木曾鉄平の暮らしが特別養護老人ホームがなぜ『西の舎』と名称決定したのか？
その答えは明確で、開館年度がたまたま十二支で言うところの酉（とり）年の春だったことから
そのように名称決定したまでのことであつて、特別に深い意味など無いとのことであつた。

ところで大正三年生れの小木曾鉄平がなぜ特別養護老人ホーム『西の舎』に入居しなくてはなら
なくなつたのか？

老後の面倒をする家族に恵まれなかつたというのか？ それとも財産的に一般社会での生活が許
されなかつたのか？

小木曾鉄平の場合、“ノー”である。その双方とも該当しないのである。

立派な息子もちゃんという。財産的にもセレブな生活さえ望まなければ、毎月定期的にキッチンと
入つて来る収入は約束されていた。

太平洋戦争が開戦すると小木曾鉄平たち若い働き者は全員が兵隊検査を受けた。小木曾鉄平の場
合。甲種合格というまことにお目出たい結果だった。

これには当の小木曾家をはじめ親せき一同大喜びしたものだつた。

「これで鉄平も大日本帝国のお役に立てる。少国民としてこれ以上の喜びはない」と。

大日本帝国の軍人として先に出征して行つた多くの先輩諸氏がしたように甲種合格した小木曾鉄

平は郷社（むらじま）に行つて武運長久（ぶうんちやうきゆう）と家門繁栄を宮司によつて祈願、入営を待つた。

役場を通じて小木曾家に“赤紙”が届いたのはその年ももう盛夏が終わり秋を迎えようとしてい
る時のことだった。

農家にとつて毎年のことながら秋とは最も多忙なシーズンといえる。

小木曾家でも稲作の収穫で年間を通じ“最も喜びの多い時期”を迎えようとしていた。

そこにもつてきてその年の小木曾家は、鉄平が出征するというので喜びは二重であつた。

二重の喜びのことを世間ではよく“盆と正月が一緒に来たようなもの”とたとえられる。その年
の小木曾家では秋になつて正に“盆と正月が一緒に来た”ような喜びとなつた。

小木曾家だけではない。当時は有能な軍人を出すということは地域の誇り（まほり）でもあつたので地域あげ
て喜びにわいた。

そのことが顕著に現われたのが、小木曾鉄平が出征する日のことだった。

出征兵士を送るために各家庭で日の丸の小旗が用意され、在郷軍人はじめ、国防婦人会（こくぼうふじんかい）まで動員
され『小木曾鉄平君の出征を祝う会』が催され、小旗を持つて声援を送る人々の列は鉄道駅まで延々
と続きバンザイ、バンザイ、と声援が途切れることはなかつた。

そんな日の丸の小旗が振られる中、小木曾鉄平は少々照れながらも小木曾家の先頭に立つて鉄道
駅まで行進したものだつた。

バンザイ、バンザイの声援があまりにも大きかつたことから、小木曾鉄平はこの時心の中から『こ

の戦に大日本帝国は必ずや勝つ』『いや勝つてみせる』と思った。『必ず勝つてみせる』それは大日本帝国の多くの兵士が胸に抱いたことだった。

ところが小木曾鉄平が入隊した部隊はどうしたことか？ 大日本帝国海軍だった。

いずれは日本の国土になるであろう中国大陸を転戦してゆく陸軍ではなかった。これには少々拍子抜けした小木曾鉄平といえた。

大日本帝国海軍の兵士として小木曾鉄平が送られたのは今日のインドネシアだった。

しかも二等兵は二等兵でも与えられた任務は炊事班ということで戦いをするものではなかった。

来る日も来る日も小木曾鉄平二等兵は兵士の炊事に明け暮れ、勇ましい戦に参加するチャンスは巡って来てはくれなかった。

日本から遠いインドネシアではあつても小木曾鉄平二等兵の上陸当初は補給船が次々に入港しては物資を陸揚げする光景は日常茶飯事といえた。「兵隊さんのため」とはいえ実にのどかなものだった。

小木曾鉄平二等兵の炊事班としての仕事は忙がしかった。二等兵だからなおさら炊事班の中でも多忙だったといえる。

そんな大日本帝国海軍炊事班の中でも小木曾鉄平二等兵は「司令」の炊事を任されたことは不幸中の幸なことだった。

戦時体制下であつても「司令」の食事だけは特別献立であり、その調理を小木曾鉄平二等兵は任

されたのだった。

補給ルートが機能していたことから食料は十分にあつた。

そんな山ほどある食料を使って「司令」たった一人のために献立を調理したのであつては、もつたないこと、と現場を任されている小木曾鉄平は「司令」プラス一人前の調理に当つた。

プラス一人前とは小木曾鉄平二等兵用のことである。

驚くなかれ、小木曾鉄平はインドネシアに駐留していたとはいつても実戦経験はまったくなく、一日三度の炊事を担当しては、朝昼夕とともに「司令」と同一の食事をしていたのである。他の二等兵としては考えもつかない役得だったといえるのではないか。

当時の生活をなつかしむ時、小木曾鉄平二等兵は『いやあ、インドネシアとは本当によいところだった』と『酉の舎』で今もって口にしてている。

しかし、インドネシア駐留がよかつたのは大日本帝国海軍による補給ルートが確保されていた時まで――。

日本が第二次大戦へと突き進み、終戦間際になり、小木曾鉄平二等兵たち海軍兵士の目の前で海軍のシンボルの存在だった戦艦大和が米軍によって攻撃沈没させられる姿を見た時、事情は一変した。

戦艦大和が大海原へ沈みゆく姿を目撃した時『もう、イカン。日本はこの戦に負けてしまうぞ』と小木曾鉄平二等兵たち全員が心の中で思ったのだという。

物流のことを考えて港湾近くに駐留していたのだが、戦艦大和の沈没を際に港湾をさけて山岳地帯に退避することになった。

食材などを携帯しての退避行軍だった。

山岳地帯の目的地ではない平坦地まで行軍した時はちょうど昼時だった。

ここで例の「司令」から軍命が下った。「この平原地帯で昼食にしよう。炊事班はただちに行動を開始せよ。他の兵は一時小休止をして待つように」と。

「冗談じゃあない。一時小休止にはよい場所かもしれないものの、このようなところで炊事をしていたら、炊事の煙がのろしのような役目をしてしまうではないのか？ たちどころに米軍に発見され、総攻撃を受けてしまうことだろうか？」小木曾鉄平二等兵は「司令」の軍命に反対した。

しかし「司令」の軍命は天皇陛下のお言葉に等しいとあつては正面から反対意見を述べることなど不可能だった。

炊事班の小木曾鉄平二等兵は「どうなつても知らないゾ」との思いで炊事の準備に取りかかった。ナベ釜を取り出して煮炊を始めるとももなく予想どおり上空に米軍機が飛来して来た。

『そろらみたことか』小木曾鉄平二等兵たちは手をつけていない食材など持てるだけ持つて近くの山林内に逃げ込んだ。

しばらくの間攻撃を続けていた米軍機が引き揚げ静かになった時、小木曾鉄平二等兵が炊事現場に戻つてみたところ、そこには米軍機の攻撃によつて無数に穴が開いたナベ釜とともに負傷した部

隊の軍人が散乱していた。昼食の準備など再開できる状態ではなかった。

『日本は負けてしまうゾ』小木曾鉄平二等兵たちは、確信することになった――。

戦艦大和を失つたことにより南洋諸島への補給ルートは断たれた。

大日本帝国になるはずであつたインドネシアでも後続の補給は無かつた。

炊事班の小木曾鉄平二等兵たちは残された食材をいかにしたら長期間の滞在に耐えられるか、食いつなぐ方法を検討することに明け暮れることとなつた。

こうなつてくると、もう大日本帝国の惨敗は明らかかなこととして海軍兵士の目に映るようになった。

今もつてどのようなルートで伝えられたのか不明であるものの小木曾鉄平の所属する部隊にも、正式に『日本の敗戦』が伝達され司令より公表された。

すると今度は食材の不足よりも『果たして日本本土に帰還ができるのだろうか』といったことに課題は移つた。

幸いなことに小木曾鉄平たちの部隊は、かつては補給船が次々に入港していた港湾近くにまで移動していたことにより『駆逐艦』の入港日時を知るには最適地にいた。

『駆逐艦』の入港日時が司令によつて伝達されると、頭を悩ませていた『日本本土に帰還できるのだろうか、どうだろうか』との戦争より不安定な悩みは解消されたものの小木曾鉄平二等兵たちの『駆逐艦』が『最後の駆逐艦である』ことを知ると小木曾鉄平二等兵は、持つて生まれた「運の強さ」

を知った。

『最後の駆逐艦』がインドネシアを離れる日は、皮肉にも『日本晴れ』に恵まれ、小木曾鉄平二等兵には惨敗兵という心境はまったくなかった。

しかも着いた港は、戦後大ヒットした歌謡曲『岸壁の母』で有名になった京都の舞鶴港だったことも小木曾鉄平二等兵の運の強さを物語っていた。

幸いといえば、舞鶴から小木曾鉄平の出身地である鉄道駅までまだ鉄路が通じていることだった。しかし故郷へ帰還する鉄道の旅といってもそれはノンビリした列車の旅ではなかった。

やつとこのことで列車に乗り込みはしたものの旅客列車でありながら座席の確保など無理なことだった。

故郷への帰還列車の旅、そこにも日本の敗戦色が色濃く漂っていたのだ。

それでも「これでやつと、生まれ育った家に帰れる」という光明があつたから列車の旅はまだよかつた。

長時間かけて小木曾鉄平たちを乗せた列車が故郷の鉄道駅に着いた時、小木曾鉄平は「日本は本当に戦争に負けたんだ」ということを実感した。

鉄道駅の屋根が無く快晴の青空からまだ強い日射が列車利用客に直接当たっていたのである。

鉄道駅の駅舎屋根が無いばかりではない。

「生まれ育った家」に帰るために駅頭に立つてみると、バンザイバンザイと出征時にはあれほど多

くの市民が日の丸の小旗を振つてにぎやかだったメインストリートの商店街までも消えて無くなつてしまっているではないか？

超高層ビルの時代ではなかったものの、小木曾鉄平が出征した頃には、高台にある明治天皇の聖跡など、絶対に見られるものではなかった――。

それが小木曾鉄平が帰還した今、鉄道駅から明治天皇の聖跡のある高台が一望できたのである。

鉄道駅と高台の間にあった商店街やら民家が消えてしまい、途中で視界をさえぎる物件は何ひとつとして存在していなかったのである。

この町が米軍機の空襲を受け九七%の市街地が焼失した結果だった。

鉄道駅駅舎の屋根が無かったのも空襲による被害の一つといえた。

それが「日本が戦争に負けた姿」だったのである。

小木曾鉄平は米軍機による空襲被害がこれほどまでに及んでいるとは想像もしていなかった。

その時になってやつと「ああ、われわれは米国に負けたんだ。あの戦争で米国に負けたんだ」という実感がこみあげてきた。

インドネシアを離れる時にはまだ心の隅で「これは何かの誤りであつて日本はことによると勝っているのかもしれないぞ。神風が吹いているのではないか？」と虫のイイことを思つて出航したものだつた。

台風が来た形跡の無かったことは幸いだったものの駆逐艦乗船時に抱いていたかすかな望みの『神風』が吹いた形跡も無かったのである。

小木曾鉄平が幼少時を過ぎた故郷の町は完全に廃墟と化していた姿を目の前にはもう日本が敗戦したことを疑う余地はなかった。

「ああ、われわれは負けてしまったのだ」炊事を担当していた小木曾鉄平元二等兵が荒んだ心で立っていた鉄道駅の一角ではどこから引き揚げてきたのだろう元大日本帝国陸軍の一団があつて「それでは上官殿これで失礼をいたします」とまだ軍隊調でお別れ会をしている光景が見られた。

戦争が終わればもう上官も二等兵といった階級も存在しないのに「それでは上官これで失礼をいたします」なのである。

鉄道駅に帰って来た旧大日本帝国陸軍兵士の中ではその時になつても「まだ戦争は終わつてはいなかった」ので「戦争は終わっていない」のだから日本はまだ「勝つてもま敗けてもいない」といえただろう。

だから「上官殿これで失礼いたします」なのであつた。市民の間に『終戦』が定着するまでには長時間を要した証のひとつといえた。

その点からすると小木曾鉄平元二等兵はたった一人で鉄道駅に生還したのだから、『終戦』を信じ込むまでの変わり身は早かつた。

目の前に日に三食の食事を任された司令の姿はないのだから「上官殿それでは失礼をいたします」

と鉄道駅の一角でお別れ会を催している旧陸軍兵士グループのようにいちいち司令に挨拶をする必要などなかったといえる。

寂しいといえば寂しい生還ではあつたものの、この小木曾鉄平の変わり身の早さから「風向き」は変わることとなり、小木曾鉄平に幸運がもたらされる時代が目の前までやつて来ていた――。

新しい時代へ向かつて駅頭から第一歩を踏み出した小木曾鉄平はとりあえず、なつかしいわが家に行くことにして歩を進めた。

出征時までは大繁盛していた日用品雑貨店が、そして食料品店の店舗そのものが存在しないことに、愕然とせずにはおられなかつた。各店舗ともに空襲によって焼き尽くされたのだろう。

小木曾鉄平は日用品雑貨店や食料品店店舗の焼け跡前にさしかかる度に足を止めては走馬灯のようになつて走り回る幼少時の店舗のにぎわいぶりを思い出しては「これでは戦後の再興は並々ならぬ事業となることだろうなあ」と決意を固めつつ歩を進めた。

すると、あるハズであろう、いや出征時までは家族が暮らしていた『わが家』が見当たらないではないか？

帰り着くべきわが家も空襲によつて焼失してしまつたことを、復員して来て今初めて知つた小木曾鉄平だったが、焼失したのは小木曾家だけではなかつた。

小木曾家の両隣りともに見事に、それは本当に見事との表現がピッタリしたように焼失してこの世から消え去ってしまったのだった。あるのはただ「ここに以前小木曾家が存在したことを物

語る宅地としての区画」だけだった。

小木曾鉄平はこの時になって戦争の無情さを味わったのだった。家屋は焼失して無くなってしまったとしても、それではいつたい家族はどうしてしまったのだろうか？ 家族まで犠牲となってしまったというのだろうか？

小木曾鉄平の不安が極限に達しようとした時になって、小木曾鉄平の背後から肩をたたく人物があった――。

その時にはまだどこでどのようにして生き延びておられたのか不明だったものの郷社を守っていた宮司様であって、小木曾鉄平の武運長久を神前で祈願してもらったその人だった。

そして宮司は、「小木曾家の家族は全員無事で、今は親せぎの家に行ってお世話になっている」と報告してくれるのだった。

『家族は全員無事』と聞いただけで小木曾鉄平にはこの時から『自分に運が向いてきた』と実感するのだった。

だったらそんな『運』を逃がしてしまう手はない。

小木曾鉄平は宮司に知らされた親せぎの家に急ぐことにした。

「それはどうもありがとうございます。小木曾鉄平ただ今こうして生還して参りました」宮司にうやうやしく挨拶をすませた小木曾鉄平の足どりは軽かった。

この時代、日本のどこでもそうであつたように小木曾家が身を寄せていた親せぎというのは農家

だった。農家の家屋は大きかった。

それも一棟二棟と多くの棟を持ちたいくなくなものだった。そんな中でも小木曾家が身を寄せていたのは農家の本屋ではなく小屋に当たる別棟だった。

別棟の小屋が家屋を焼失した小木曾家のために使われていたのである。小屋といつても応急的に改修が施こされ生活するのに不便はないように配慮されていた。

その二点だけをとつてみても小木曾鉄平は『運の強さ』を知るとともに、時代の風が小木曾鉄平に向かつて吹き始めているのを感じるのであった。

農家の小屋に身を寄せていた小木曾家に鉄平が復員してみると、家族総出で喜んでくれた。

この時代、旧大日本帝国陸軍の兵士として徴用された仲間の多くは中国大陸で、また南方諸島で戦死してしまつた例が目立つたのである。

戦時中には戦死者を出した家庭は『誉の家』としてもはやされ、地域の神格化的扱いを受けていた。

『誉の家』には戦死者を出した証としての章証が張り出され、その玄関前を通行する際には立ち止まって深々と一礼することが半ば国民の義務のように課せられていた。

戦死者は『神格化』されつつあつたのだ。

小木曾家では二等兵の鉄平は炊事班として大した手柄をたてた訳ではなし、ましてや元気に炊事に精を出していたこともあつて『誉の家』とはならずすんだ。

その町を襲った空襲では小木曾家をはじめ「誉の家」を次々と火の海として飲み込んで行った。戦死者を出した家はもう名誉ある戦死でもなければ「誉の家」でもなくなってしまった。

空襲で焼失した家の中には小さいながらも復興を果たす実力者が始めたものの、二度と「誉の家」の章証を張り出すことはなかった。市民の口からも「誉の家」の言葉が聞かれなくなった。

「誉の家」は終戦とともに消え去り、タダの家と化したのだった。

誉の家の称号が与えられることのなかった小木曾家では、鉄平が生還したことにより、家族が一人増える結果となった。

貴重な働き手が一人増えたのである。だから鉄平の生還には大きな意義があった。

単に男の働き手が増えた、というだけでなく、二等兵の鉄平は戦地で炊事ばかりをしていたので調理の腕前は超一流であつて誰れにも敗けるものではなかった。

これには母親が驚くやらビックリするやらで大層喜んでくれるのだった。

それは、わが子が生還したことを女として喜ぶというよりも、男子厨房に入らずの時代の中、生還した鉄平は母親に替わつて炊事のいっさいをこなしてしまつたのだから、小木曾家は一八〇度生活が変化したのだった。

小木曾鉄平はただ朝昼夕と日に三度の食事を調理して出すのだが、その『味』がまた格別良かったことに母親は二重の驚ろきを感じた。

それもそうだろう、小木曾鉄平は海軍兵士として出征こそしたものの、現地では炊事担当であり

調理はプロ中のプロとして働いてきたのである。

母親の立場からすれば鉄平が生還したうれしさの上に、調理の腕で母親を超える技術を身につけてくれていたことはうれしい、というよりも、いよいよ自分も齢をとつてしまつたなあ、といった一抹の寂しさを感じる秋だった。

しかし小屋で生活する小木曾家の大家族分の食事を調理しなくてはならないという家事から解放されたことへの精神的軽減は大きかった。

大げさに言えば「これでわしも薬をして長生きをすることができると内心思いました。そして心が軽くなるといつい口まで軽くなつてくる——」。

気分をよくした母親は、近所の婆さん連中に会うと「海軍から帰つて来た息子の鉄平ときたらそれはそれは調理が上手で、ジャガイモの煮つころがしくらいしか出来ん、私じゃあとても太刀打ちなんかできん。お陰で今じゃあ調理には手を出さんでもすむので、大助かりだわ——」とホラを吹いてまわるほどだった。

いや母親の話は別にホラなんかではない。

小木曾家の誰れもが鉄平の調理を「美味しい美味い」と食べてくれるのだから調理の点については母親として立つ背がないといった状態だった。そして鉄平の調理のよさは風潮として広く伝わってゆくのだつたがそのことが鉄平のその後の人生を大きく変えてゆくこととなるのだった。

ある日「うちの鉄平は調理が大変上手で……」と話している母親の元に鉄平の縁談が持ち込まれ

てきたのである。

この時代、多くの戦死者を出した、いわゆる「誉の家」の目立つ地域では男性の人口、それも適齢期の男性は少なく、女性は花ムコ捜しに苦勞していた。

無傷で復員した小木曾鉄平はその上に調理の腕前は母親以上とあつては正に「三国一の花ムコ」候補者だった。だから縁談の一つや二つどころか、断わり切れないほどの縁談が舞い込んで不思議なことではなかったのだ。そんな縁談の中に小木曾鉄平は気になる女性になる女性が一人含まれていた。

それは鉄平よりも六歳ほど歳下の幸子という名の娘だった――。

気が早いといえ早かったかもしれないものの鉄平が国民学校に通っていた頃、幸子という名の可愛い生徒が目にと留っていたからだった。

母親としては鉄平に早く結婚をして欲しい、との思いからいくつもの縁談を勧めてはいたのに当の鉄平は少しも乗り気を示さずスツカリ困り果てていた。

「今度もダメだろう」と母親が幸子との縁談を持ちかけたところ、鉄平からは思いもよらず「とりあえず会ってみるだけだったら会ってみてもよい」との色よい返事が返ってきたので、先方にその旨を伝えたところ『お見合』の日時が確定した。

郊外の山上に近い料理店がお見合会場として設定されたのである。

山頂にまでは空襲は及ばず料理店は無傷のまま営業を続けていた。

ただし欠点だったことは板前が出征したまま今だに帰っていないことだった。

あまり立派でもない姿で小木曾鉄平が料理店に着くと、もう幸子は一足先に会場料理店に入り通された部屋でくつろいでいるところだった。

大きく成長したとはいえ国民学校時代のかすかな記憶の中にある「幸子」の面影だけは残っていて鉄平にはスグに「あの時の可愛かった生徒だ」と分かった。

可愛いいばかりかその時の幸子はもう色気づいた娘へと変身しており、鉄平が三国一の花ムコ候補生なら、さしずめ幸子は「三国一の花嫁」候補生といえる女性になっていたのである。

さあさあ三国一の花ムコと三国一の花嫁のお見合となれば「三国一のカップル」の誕生を夢みてもバチは当たらないことだろう。

ところでお見合となれば若い二人で食事でもしながら話を！ということが相場というものである。

しかしこの時、先に料理店に入つて部屋に通されていた幸子が不思議なことを口にした。料理店でありながら食事ができないというのだった。

第一の理由は板前が復員していないので、料理ができないということだった。

この時も風は小木曾鉄平に向かつて吹き始めており、強い運が小木曾鉄平に味方しだした。

板前不在、を知つた小木曾鉄平は料理店の女将に頼んだ。「それだったらこの俺に板場に入らせてもらえないだろうか？俺が料理を作つてやる！」と。

小木曾鉄平の調理の腕前の確かな話は女将さんの耳にまで届いていたので、板場の使用許可が出

た――。

料理店の池にいたコイをタモで捕まえて刺身を作ろうとしていると、幸子が静かに板場に入ってきて、ジーンと鉄平の包丁さばきを観察していた。三国一の花嫁修業を積んでいた幸子などよりも包丁さばきは板についていた。この時幸子は鉄平の包丁さばきに惚れてしまった――。

となれば、話なんかしなくっても、二人の気持ちは合致をみた。

鉄平にしてみればはるか昔のことではあっても、幸子は可愛い娘だと気にかけていた生徒である。

片や幸子は目の前で鉄平の包丁さばきに惚れ込んだところだった。お互い相手が気に入らない訳はなかった――。

二人は会話こそなかったとはいえお見合は『大成功』に終えることとなった。

良人さんが立つて次には「結納」やら結婚式の日取りが二人の知らないところで次々と進められて行くのだった。

そんな時また時代の風が小木曾鉄平と幸子に向かって吹き始めていた。

市が町の戦災復興事業を立ち上げることになったのだ。「いくら市域の九七%が焼失してしまつたからといって、いつまでも焼土と化したままではいけない。国が奨励していることでもあるので、戦災復興事業を手がけ、戦前以上に活気のある町を作ろうではないか」との着想によるものだった。

市役所の都市開発部が中心となつて河川の流域に、今風に言うなら「一大団地」を造成しよう

の構想だった。

人間生活の営は古来から河川沿いで展開されてきた。今また市の戦災復興事業着手に当たつても、河川沿いに一大団地を形成しようというのだった。

具体的には七百戸の市営住宅を建設し、児童公園も整備して快適なモデル街区にしようというのである。

最終的には七百戸の市営住宅になるとはいえ、まだ終戦直後のことでもあり、物資が乏しかったことから、住宅課は「とりあえず市営住宅五十戸を第一期事業として建設しましょう。五十戸だけなら現在の状況下であつても何とかかなる」と動き出した。

空襲で町の大半が焼失してしまった市にとつて、たとえ五十戸とはいえ市営住宅が新たに建設されるプランは、市民に生きてゆく勇氣と活力を与えるのに十分な計画だった。

何しろ、その時まで市営住宅といえば、旧軍部から払い下げられた国有財産の一部を改修しただけで、「住宅が無くて困っている方はさあどうぞお使いになつてください」と入居者を募集して供用しているという有様だった。

旧軍部の施設を改修しただけ――であつても市内は住宅不足の世の中とあつては市営住宅の入居希望者ばかりだった。

屋根の付いた市営住宅には入居希望者が殺到し、「入居するのは容易なことではなかった」。

そうした社会情勢下に、市の都市開発部は戦災復興の名の元で一大団地構想をたて、住宅課は、

たとえ五十戸と小規模ではあっても市営住宅の建設に着手したのである――。

一方、板前不在で「一時はどうなることだろう」と心配されていた小木曾鉄平、幸子の見合は成功したことにより、結納まで話は進んだ。そしてまた問題が起こった。結婚式場の確保だった。今風にどこの町にもセレモニーホールのある時代ではない。

結婚式そのものは近くの神社にお願いして挙行するにしても、「披露宴」は花ムコ、花嫁の実家で行う例が多い時代だったものの、小木曾家が身を寄せている農家は大家族であって、そのゆとりまでなかったのである。

「イイ相手が見つかったものだ」と喜ぶ幸子の家では親せき一同集まって披露するだけの余裕があった。問題は小木曾家の方であった。

「ないものをアテにしていたのでは話は進まない」ことから、見合場所として使用した山上の料理店に相談したところ、アツサリと披露宴の会場使用が認めてもらえた上に、「いつそのこと宮司さんを寄んで、結婚式そのものも、うちの料理店であげることになったら？」と女将はハプニングな提案を言うのだった。

『結婚式そのものも料理店であげる』となれば、花ムコやら花嫁だけでなく関係者にとつても会場移動の手間が省け――大助かりということになる。

市内の道路は至る所震災によって破壊されており、しかも自動車交通も今日のように普及していない時代、数十人もの人々の移動は極めて困難だった。料理店女将の提案は、そうした困難さをいっ

さい省こうというのだから、反対する方がおかしいというものだった。結婚式会場、披露宴会場まで決定したのに解決しなくてはならない問題がまだ一点残されていた――。

料理店とは名ばかりであってかんじんの板前職人が不在のままという致命的な問題だった。

それだったら「いつそのことまた小木曾鉄平さんに板前として腕をふるってもらったらどうなんでしょう」と助っ人を口にしたのは鉄平の腕前に惚れ込んで、結婚を決意した幸子だった。

いずれは料理店を増築して『結婚式のできる料理店』を考えていた料理店女将は「いつ帰ってくるのか見当のつかない男性を待つていたって仕方ないことだわねえ」ということになり、結婚式披露宴の料理は小木曾鉄平に任せられることで決着をみた。

ここに世にも珍らしい花ムコ板前による結婚披露宴が行われることとなったのである。

だが当の小木曾鉄平は結婚式当日多忙を極めた。

まず、結婚式に先立ち料理の仕込みが待っていた――。

鉄平は「結婚したら、この先の人生どんなことが待っているのか分からない。どのような事態に立ち至った場合でもシツカリした信念を持ち、三国一の花嫁とまで言われた幸子を守つていなくてはならないのだ」と力を込めて調理の下ごしらえをした。

食材などあまり豊富でない日本中が貧困の中にあつたとはいえ、この時小木曾家が身を寄せていた家庭が農家だったことが幸して「一生に一度のことだから」と主要作物を提供してもらえたこと

も鉄平の「運」の強さを物語る一コマといえた。

そしていちおうの下ごしらえをすべて整えたところで鉄平は、花ムコ準備室に移ると、羽織袴の日本男児としての正装となり、文字どおり「三國一の花ムコ」の誕生となった。

同じ頃、幸子は花嫁準備室で、美容師によって着飾り、出番を待っていた。ソワソワしている様子はない。落ちついたものだった。

定刻になると全員に会場入りが告げられた。

驚くことに大きな声で「花ムコ花嫁の入場です」と司会役を演じたのは料理店女将だった――。

この女将『総合結婚式場』増築の夢を何としても実現じげんさせるつもりだった。

だから自から司会役を演じているのだ。

「盛んな拍手でお迎えください」女将の司会としてのトーンが一段と高まった。

神の代役である宮司は「ヤレヤレ、出征兵士として送り出した青年の結婚式までさせられるとは想像もしていなかった」と複雑な心境だった。

しかし『戦後第一号』となる結婚式のことであり失敗は許されなかった。

「ハイ全員ご起立してください」「それでは神様に対して一札をして……」と名司会のお陰で式は無事に終えることができた。

新生ニッポンのカップルがこの時、神の前で誕生したのである。神国日本に神風は吹かなかつたのに、小木曾鉄平に神様は最上の人生を約束してくれたのだった。

料理旅館を増築して総合結婚式場を目指す女将はこの結婚披露宴を機に、総合結婚式場が実現した場合になっても、もし以前の板前が戻らなかった場合には――、小木曾鉄平を新しい板前として迎えようと決意を固めたのだった。

となれば、話は早い方がよい。「あれほどの料理の腕をもった職人はもうそれほど多くは残ってはいない。もし他の料理店にでも採用されてしまつてはタイヘンだ」ということで、女将は結婚披露宴が終わると、即座に花嫁準備室にかけて、新婦の幸子ゆきこに対して交渉を持ちかけるのだった。

驚ろいたのは小木曾鉄平の奥さんになつたばかりの幸子ゆきこだった。

女将さんがとんで来たというので「料理か何かで失敗があつたのではないか？」と心配しながら、女将の話の聞いてみると――。

将来の総合結婚式場構想をデーンと聞かされた上に「その時には、小木曾鉄平様を板前として招くことになるかもしれないので、奥様としてもそのことをよく覚えておいてほしい」と言われた上に「ご主人様にはぜひとも、当料理旅館に来て、腕前を存分にふるつてほしい。ご主人様にもそのように伝えておいてもらいたい」と頭を下げられてしまつたのだ。

女将がしきりと『奥様』『奥様』と強調するものだから幸子ゆきこは「結婚とはこういうものか」と胸にジーンとこみ上げてくるものがあつた。自分ではなくても昨日まで赤の他人ひとだった男性おとこがそれほどまでに誉められれば、悪い気持ちではない。それに、板前として働いてもらいたい、と働き口まで世話してもらえるとあつては「まあ、総合結婚式場はこれからの時代、必要な場所でしょうか

ら、そのような場所で働かせてもらえるのでしたら、主人もさぞやうれいことでしょう？ この場で即答はできませんけれどもいいでしょう、主人には後でよく話して聞かせておきますから——」と答えるのがやつのことだった。

とはいえ、『主人の』『主人に』と『主人』という言葉が特別意識もしていなかったのに、自然とスラスラと口から出たことに幸子は自分でも驚くのだった。

「あら、私は今本当に結婚したんだ。あの小木曾鉄平さんの奥さんになったのだ」と思うと、うれしくてうれしくてたまらない幸子だった。

とはいえ、山上に総合結婚式場が増築されるのは、まだ当分先のこと。

小木曾鉄平幸子の新婚生活は、相変わらず小木曾家が世話になっている農家の小屋からのスタートとなった。

幸子が加わったことにより小木曾家は大家族とはなったものの、「またまた強力な働き手が一人増えるといった財を得た」のだった。

当時、世間の人は言ったものだ。「小木曾さんとはいいなあ。あんなに働き手の嫁さんに来てもらつて、もうこれで何があつても大丈夫だろう——」と。嫁をもらうということは「好きだとか愛だとかどうだ」と言う前に働き手が一人増えることを意味し、料理店の女将さんでなくとも大歓迎をする風調にあつた時代だからこそ、「小木曾さんとはいいなあ」なのであつた。

そのことが顕著に現われたのは小木曾家に小屋を提供している農家だった。

昼食や夕食の時間は農家、小木曾家ともにほぼ同じだった。調理も同じ刻から始まる。

小木曾家ではもともと鉄平と母親の二人が「お昼は何にしようか？」とか「夕食はどうしよう？」と知恵を出し合つて作業を進めており、他の家庭からすれば「二人での共同作業だから楽だろうなあ」と思われていた。

そこに、鉄平が結婚したことによつて幸子が加わり、食事準備は三人の共同作業となつたのだ。これでは小屋の勝手場だけでは少々狭すぎた。

「これではイカン」と感じとつた幸子の主人・鉄平は「農家の方に行つて手伝うように幸子に命じた」のである——。

姑の母親は同意見であつたので、小木曾家に、世間で言うところの「嫁姑戦争」は起こらなかつた——。

嫁姑戦争がなかつたばかりか、嫁の幸子が農家の方に何かと理由をつけては顔を出し「いいわ、私が今から手伝うから」と共同作業をしてくれた。

これじゃあ小木曾家の嫁なのか、それとも農家に来た嫁さんなのか分かりやあしないほど、幸子は農家に行つては、働くものだから農家の婆さんも「こりゃありがたい。本当に助かるわあ」との喜びようだった。

元気な時にはヒョイヒョイと何気なく持ち運べた鍋や釜ひとつをとつてみても人間を重ねてくると、「あれ、どうしてこんなに重いのだろう」と鍋釜を運ぶことでさえ、重労働となる例が目立つ。

食事のための煮炊き、となれば食材が入っているだけに重量はいつそう増して重く感じられてならない。

「エライなあ、疲れてならんわあ。誰れか助けてくれんかのお」とでも思っているところに、小屋を提供している小木曾家から嫁が出てきて「私が手伝ってあげる」と言うのであれば幸子は正に「神様のような」存在だった。

幸子は、三国一の花嫁なんかではなく神様の化身といえた。「小木曾家の嫁さんが農家の家事を手伝っている」評判はたちどころに近在に広まってゆくのだった。

評判が評判を呼ぶというケースが世の中にはよく存在する。

小木曾鉄平・幸子夫婦の誕生がそれで、二人は市役所都市開発部にも伝わっていた。

住宅課では、すでに市営住宅五十戸の新築に着手していた。都市開発部が構想をたてた七百戸の一大団地の一部分であつて、ほんの五十戸だが、一戸、二戸と実際に市営住宅が建ち始めると「五十戸であつても、これだけの市営住宅になるのだつたら、その中の一戸くらいは大衆食堂に当てたらどうだろうか？ 住宅が五十戸あつたら大衆食堂が必要な時代が来るのではないだろうか？」との意見が住宅課内で起こつた。

『時代が要求しているのだつたら……』ということでは住宅課の机上論として大衆食堂プランが実現に向かつて動き出した。

五十戸の中でもまだ着手していない一角の一戸を大衆食堂用市営住宅としよう、ということになった。

児童公園に面した角地で公道からもよく目につく場所の一戸だけは、大衆食堂としてすぐにも開業できる市営住宅として建設着手された――。

大衆食堂用の市営住宅といったところで、外観は平屋建てであり、他の市営住宅と区別はつかなかった。ただ本来なら日本間とする一室だけが床を張らず畳敷きとはなつておらず、土間として残され確保されている点が相異しているだけといえた。

都市開発部住宅課の考えとしては、床張りを省いた土間の部分にテーブルを配置して、客室として使用してもらおう、ということらしかった。

カウンタ―内には、調理場、農家でいうところの勝手場が設けられた。カマドは業務用だけに農家の勝手場よりは大型で、しかも堅牢なものが住宅課によつて設置された。

あとは、客用のテーブルとイスを土間に配備するだけで、いつでも営業開始できる体制だった――。そして、いよいよ入居者の募集が始まる。

市営住宅などいわゆる公営住宅は、現に住宅に困っている人たちのためにある。市街地の九七％が戦災で焼失した町では、大半の市民に、市営住宅の入居資格はあつた。募集条件を満たしていたのである。

第一次事業として建設整備できた市営住宅は五十戸だけ（ただしその内の一戸は大衆食堂用）だけなので、市営住宅が完成したとはいつても、焼け石に水の状況だったことから、市役所都市開発

部住宅課には、連日、入居希望者が押しかけることとなった。

「書類で見ているだけではよく分からん」といった希望者には『モデルハウスの見学会』のようなことまでして住宅課職員は対応に当たった。川沿いに建つ五十戸は風通しがよく評判は上々。

中には、大衆食堂用に建設の土間部分を見学して「この一戸だけはまだ未完成のようだなあ!」との意見が一部から聞かれはしたものの、市営住宅見学会の総評は上々といえた。

見学会の評判がよければ、申し込みも当然多く、入居者は抽せんで決定されることになった。ただし抽せんによる入居は完成した市営住宅五十戸の中の四十九戸だけだった。

大衆食堂用の一戸については、プランが立てられた当初から、小木曾鉄平さんに使ってもらったかどうか? との声が住宅課の課長はじめ担当職員の間で一致していた。

小木曾鉄平・幸子夫婦が町の郊外で焼け残った山上の料理店で結婚式を挙げたことは市役所都市開発部住宅課に、それとなく伝わっていた。

しかも「新郎の料理の腕前は相当なものらしいぞ。たとえ建物は残っていても、板前が戦地へ出征したまままだ復員していないので料理店の営業はとも無理なことで半ばあきらめていた女将さんなんか、新郎が料理の腕をふるってくれたので営業できたと喜んでいたゾン」と小木曾鉄平の評価を高める尾ひれまでつけて住宅課には伝わっていたのである――。

だから市営住宅ではあっても大衆食堂用の一戸だけは一般公募ではなく、「料理店の女将さんが誉めたという小木曾鉄平さんに入居してもらおう!」と話は進んでいったのだった――。

山上の料理店女将が小木曾鉄平の料理人としての腕前に太鼓判を押しした話は、都市開発部住宅課の職員全員が耳にしていたので異論はなかった。時代の風は小木曾鉄平に向かって「やれ、やれ大衆食堂の経営を引きうけろ」と吹いていたのだ。

このことは、やがて住宅課の総論として都市開発部長によって助役、さらに市長へと報告されてゆくのだった。

都市開発部長の具申に対して、市長の反応は「いいじゃあないか」「市にとってメインとなる団地だ。休息の場として大衆食堂は素晴らしいことだ。そのような料理人がいるのだつたらなおさらのことだ。立派な料理を出してもらって、市民に大いに勇気を与えてもらおうではないか!」ということだった。

これで話は決まったも同然といえた。

だがまだ、かんじんの小木曾鉄平はそのことを知らない。小木曾鉄平としては、あくまでも「山上の総合結婚式場ができれば、その板前として働く」心づもりでいた。そのことを奥様として女将から聞いて鉄平に伝えた、幸子だつてももちろん「うちの主人はゆくゆくは総合結婚式場の板前となる」ものとはばかり思っていた。

そこにもつてきて、市長が「市営住宅の大衆食堂は、小木曾鉄平とやらに任せよう」というのである。

市長の決断は、翌日になってから住宅課職員が直々に小木曾家にやって来て、鉄平に伝えた――。

つまり市営住宅とはいいいながらも、他の住宅のように、入居希望者が申込書を住宅課窓口に提出するのではなく、「どうか大衆食堂用の住宅に入って大衆食堂を経営してはもらえないでしょうか？」と三顧の礼でもって迎えられたのだった。もちろん、小木曾鉄平にとって悪い話ではなかった。しかし、小木曾鉄平は、平身低頭の住宅課職員に対して即答は控えた――。

市営住宅での大衆食堂経営は、イイ話ではあるものの、小木曾鉄平には先に料理店女将から「総合結婚式場が完成したら、『板前として働いて』と勧誘があつたばかり」だった。

大衆食堂を任せられるとあつては、まずもって料理店女将に相談して、板前の話を断わっておく必要があつたのである。

それに何よりも鉄平を信頼している、幸子の意見を聞いておく必要があつたのである。

夫婦だからといつても、二人は考え方の違う人権を持った人間である、ということも鉄平は尊重したかったのだ。夫婦だからといって妻が何でも主人の意見と同一ということはないことを鉄平は根本から理解していたのだ。

こうした諸事項について一応は解決させなくてはならないことから、鉄平は市役所住宅課職員の勧誘に対して即答を控えたのだった。

「鉄平さんにとってこの上ない、話だと思つたのに――」、色よい返事がなかったことは、勧誘に来訪した住宅課職員にとって、少々不満らしかったものの、住宅課職員は「まあジツクリと考えた上で返事をして下さい。私たちは、鉄平さんの腕前を楽しみにしているのですから」と、その日は

引きあげるのだった。

その夜、鉄平は住宅課職員が来訪して大衆食堂経営を勧誘していった一部始終を妻の幸子に説明した。

幸子の感動は大きかった。市役所がこれからつくる一大団地の中に、自分たちの店が出せる感動もさることながら、それほど大事な話を自分一人で結論を出してしまうことなく、自分に対して「前はこの話をどう思う？」と幸子に意見を求めたことについて感動したのだ。

つまり、鉄平は妻である幸子を一人前の人権としてシツカリ認めていたことになり、幸子は妻としての重さを身をもって感じるとともに『結婚』したことを再認識した夜となつたからだった――。

「どう思う」と意見を求められた幸子だったが、幸子の考えも、鉄平と同じであり「山上の料理店女将さんにだけは聞いてみないことにはねえ」と、幸子の頭の中でも女将の期待だけは裏切られない、思いが大きかった。

ということになり、翌日になると早速幸子は二人が挙式と披露宴をした山上の料理店へ出掛けに行った。

もちろん、女将に、市営住宅で大衆食堂を経営する許を乞うためである。

料理店女将の答は？「いい話じゃあないの、住宅課の勧誘を断わる理由なんかないじゃあないの。確かにこの料理店はいずれば増築して『総合結婚式場』にしたいとは考えているのだけれども、それはまだ当分先のこと。いつになったら実現できるのか？今のところ完成の時期についてメドは

立っていないのよ。それに、たとえ『総合結婚式場』ができたとしても、大安吉日の日ばかりではないのだから、毎日のように結婚式があるとは限らない。結婚式は一月月に数組も利用してもらえればよい方だと思っている。つまり鉄平さんには月の中数日間だけ『総合結婚式場』の板前として板場に入ってもらえれば十分なのだから、今はとも角、市営住宅の中で大衆食堂をさせてもらえたら、そちらの方を優先させるべきだよ」と、鉄平の市営住宅大衆食堂経営に「大賛成」が得られた。

ということになれば、市営住宅の大衆食堂経営にもう何の支障もない——。

「みんなが賛成してくれるのだったらシツカリやろうな」と小木曾鉄平幸子は、時代の風を二人の胸で受け止めたのだった。

大衆食堂勧誘には、住宅課職員が小木曾家に外向いて来たのに、「回答」を持った鉄平と幸子の二人は、今度は二人そろって市役所都市開発部住宅課まで連れだつて行ったのだった。

二人がそろって住宅課窓口に行ってみると、そこには市営住宅に入居申し込みをする市民が多数押しかけているのに、まず驚いた。

「これほど多くの市民が入居を希望しているのに、抽せんの結果、幸運にも入居できるのは四十九戸だけかあ。そこにゆくと俺たちは、経営してはもらえないでしょうか」と誘われたのだから、断わつてもしまつたら罰が当たるといふもんじゃあゝ」もうスッキリ大衆食堂経営を決め込んで来訪した鉄平と幸子だったが、住宅課窓口の混雑ぶりを見て改めてそのように思うのだった。

大衆食堂経営の腹を固めた小木曾夫婦は堂々としたものである。他の市営住宅入居希望者のよう

に縦横左往することなくしていた。

すると、小木曾夫婦を見つけた、住宅課職員の方が二人に近づいてきて「今日は大衆食堂経営の回答を持参してこられたのですか？」と尋ねてきたので「断わってしまったては失礼に当たるので、ひとつ市営住宅の中で大衆食堂を経営してみるのも何かの縁と思われるので、今日は二人でこうして大衆食堂をやらしてもらおうと思つて来て来たところですよ」と報告すると、職員は、小木曾鉄平・幸子を住宅課長席の前まで案内した。住宅課窓口では「こつちの方が先だ」とか「早くしてくれんか」と相変わらず混雑しており、にぎやかだというのに二人は群衆の中から連れ出されて住宅課長席前に案内されたのである。今日風に表現するなら、さすずめ超VIP待遇といったところである。

住宅課長席の前まで案内された小木曾鉄平と幸子は驚いた。すでに住宅課職員とは数回会った経験があり、いわば顔なじみだったのに対し、住宅課長はこの時が二人にとって、まったくの初対面だったの——。

住宅課長は「もう旧年来の顔なじみ」といった表情が露骨に現われニコニコとしていたからだ。住宅課長としては「きつ」といい返事を持ってきてくれたのだろう！」と期待していた向きがあつて、ニコニコしていたのである。

つまり、市営住宅の大衆食堂を小木曾鉄平・幸子夫婦が経営に当たるとは、それだけ「大歓迎」されていたのだ。

とはいつても借りるのは市の公有財産である市営住宅である。

住宅課課長は「いちおう、どの方にも申込書を提出していただくことになっておりますので」と、小木曾鉄平・幸子夫婦に言った時、小木曾夫婦は「やっぱりお役所だなあ、これがお役所仕事というもんだらう」と顔を見合わせ思わず、苦笑したのだった。

苦笑していたのでは返事にはならないので、ここは大衆食堂経営主となるであろう小木曾鉄平の意思でもって「とりあえず、大衆食堂用の市営住宅の物件を確認してみたいので、申し込みは、物件確認をしてからということ——」と回答したところ、住宅課課長は「そりゃあ、どのような立派な施設であるのか自分の目で確かめないことには回答は無理でしょう」と了承したので、小木曾鉄平・幸子夫婦は、一旦住宅課を辞して出直すこととなった。

その時になっても市役所都市開発部住宅課窓口は混雑していた。

四十九戸の市営住宅入居希望者の列は止切れることはなかったのである。

市役所都市開発部住宅課を出た、小木曾鉄平・幸子夫婦はとりあえず、農家の小屋である小木曾家に戻った——。

夕刻になると、幸子はまた母屋に行つて夕食の手伝いをする。農家の主婦は、あと数カ月もすると大衆食堂の開業で、幸子がいなくなるなど知らないものだから「本当にいつも助かるわあ、幸子さんにお嫁に来てもらつて本当にありがたいことだわあ」とノンビリとしたものである。しかし、小木曾家に幸子が嫁としてやつて来たことが、農家の主婦から、家事という重労働の一部を解

放したことだけは事実といえた。

そして、その夜二人は、いよいよ最終決断の詰めをすることになる。

「住宅課の課長からは、見ず知らずの二人を手厚くもてなしてもらえた。その上、山上の料理店女将まで、市営住宅の中の大衆食堂だったらやつておいた方がいいと後押ししてもらえた」ということで、夜が明けたら、とりあえず、その大衆食堂用の市営住宅の見学に行こう」ということになった。

その日は朝から快晴だった。小木曾鉄平・幸子夫婦は、ピクニックにでも出掛けるような気分です営住宅の物件見学に出掛けるのだつた——。考えてみれば、小木曾鉄平・幸子夫婦は山上の料理店で結婚式と身内に対しての披露宴こそ済ませはしたもののハネムーン、いわゆる新婚旅行はしていなかった。

インドネシアから駆逐艦で生還してからのというもの、あわただしく時間だけが過ぎてゆき、新婚旅行のことまで考える余裕がなかった。

ハネムーンに至つてはそんなシャレた言葉を知っている市民は少なかった。

というわけで、快晴に恵まれたこの日、大衆食堂用の市営住宅見学会がはからずも二人の新婚旅行に相当したものであつた。

小木曾鉄平・幸子夫婦が、川沿いに造成された一大団地の用地まで行つてみると、最終的には七百戸もの市営住宅となる用地だけあつてその広さにまず圧倒されるのだった。

第一期事業で整備された五十戸の市営住宅は、川に近い公道に面して建てられており、その一方

には「児童公園」が整備されていた。「児童公園」といつても「砂場」の他にはスベリ台とブランコが各一基備えてあるだけだった。

砂場にスベリ台とブランコといたって素朴な状況ではあったが、戦災復興の事業の中では画期的な公園といえた。

小木曾鉄平には、そのいたってシンプルな児童公園を見た瞬間、早くも子どもたちがその砂場やスベリ台、ブランコで楽しく遊び、母親がブランコを押している家庭的な雰囲気や頭の中に浮かんだ――。

子どもたちの楽しそうな声が今にも聞こえてくるのではないか？ そんなことまで空想するのだった。しかし、現実には目の前にあるのは大衆食堂用に建てられた市営住宅があるだけ――。

そう、小木曾鉄平・幸子夫婦が入居予定の大衆食堂用の市営住宅は「児童公園」の目の前に立地していたのだ。地理的条件は最高といえた。

そして、川に近いことは何よりといえた。

山上の料理店ではわざわざ池を造って鯉を養殖していたほどである。

その池の鯉を小木曾鉄平は見事な包丁さばぎで料理したことによって幸子の心をつかみ結婚することができたのである。

『水』とは、小木曾鉄平にとってきわめて縁起のよい物質である。

川にはその『水』が大量に流れている。まさか川に生息する鯉まで大衆食堂の料理の食材にして

しまうとは考えもつかないことだった。

しかし、ただ、川が見える、というだけで心が安まるのである。小木曾鉄平は自分たちに用意されている市営住宅が大いに気に入った。

一方、妻の幸子にしても、主人鉄平とともに大衆食堂向けの市営住宅を見物したその時から、「これでやつと、二人だけの新婚所帯がもてる」といった甘い夢に加えて「ここが新婚所帯の城となるのだったら、この城を鉄平さんと二人で運営すれば、大衆食堂として成功するのではないか？ いや、何としても二人の力で成功させてみせる。うちの亭主の鉄平さんは料理の腕前は、一流だから大当たりするに違いない」と信じ込んでしまうのだった。

となれば話は早い、小木曾鉄平幸子夫婦はその夜、大衆食堂向けの市営住宅に入居する決意を固めるとともに、二人で力を合わせて大衆食堂の成功を誓い合うのだった――。

夜が明けると朝の風が清々しく感じられた。それは昭和二十年八月十五日の日本の敗戦くらい、ずくと続いていた、暗くどんよりとした鉄平たちの気分を一掃する朝の風だった。しばらく忘れてしまっていた爽快さだった。

小木曾鉄平はこの時も時代の風が自分たちに向かって吹き始めていることを実感し、その、時代の風に今、妻幸子とともに乗ろうとしているのだった。

未だに身を寄せている農家小屋の中で、幸子は家族の朝食の準備をしている最中だった。

鉄平は、忙がしい幸子を小屋の玄関まで呼び出し、時代の風が吹き始めている話をしてみるのだっ

た。

幸子は「何だか知らないけれども、私もちょうど、そのようなことを考えているところだったよ」と同調してみせた。小木曾夫婦は市役所が開庁して業務が始まり次第、大衆食堂用の市営住宅借用のために、申込書を提出することにした――。

新しいことを始める。それはいつの時代にあっても大変なことに相異なる。まして小木曾夫婦が大衆食堂を開業しようとしていたの終戦直後の混乱期のことであり、大変な加減かげんは現代の大変さよりもはるかに大変なことであった。だから、小木曾夫婦の決断は相当なことといえた。

しかし、その半面喜びも大きかった。何しろ何かしようにも物資が何もなし、何もできなかった時代のことである。

市役所が、市営住宅内であつても食堂を開業させてくれる、ということは、賞金三億円のジャンボ宝くじに当選したも同じようなことといえるのだった――。

この喜びを誰れに伝えよう！ 喜んだ妻幸子は、農家にかけて込んで、やはり家事に忙しい主婦に対してこの夢の話をしたところ、「今度市営住宅ができて、その中には大衆食堂ができるとは聞いていたのだけれども、その大衆食堂を、あんたたち新婚夫婦が経営するというのかね。こりやまあビックリだわな」と驚く一方で、「でも、あの鉄平さんが腕をふるうのだったら、そりやあ大当たりするわよ、私しやあそう思うよ」と太鼓判を押してくれるのだった。

さらに「大衆食堂を経営するとなつたら色々な食材が必要となることだろうけれども、まあ満足さらに「大衆食堂を経営するとなつたら色々な食材が必要となることだろうけれども、まあ満足」のいく量だけという訳にもゆかないだろうけれども、できる限り、うちの作物を運んで提供するの、大船に乗ったつもりで食堂経営に専念してほしい」と助け舟まで出してくれるのだった。日本国民が食糧難にあえいでいた時代にこの農家の主婦の「助け舟」はまことに有がたく、また力強いものといえた。

「助け舟」を得た、小木曾鉄平幸子夫婦は、軽い足どりで、市営住宅の賃貸申し込みのために、市役所に向かった――。

市役所では、都市開発部住宅課に行つてみると窓口は相変わらず混雑していた。市営住宅の申し込みには、たとえ申し込みでも、なかなか抽選に当たらないので、大半の市民がハズレてしまい、再度挑戦を試みる市民ばかりであり、住宅課窓口の行列はなかなか減らなかつた。

しかししたつた一戸だけとはいえ、大衆食堂向けの市営住宅は、市民の誰れでもが入居できる、という訳ではない。

まず入居条件の第一に「大衆食堂」を経営することがあつた。戦地で炊事班を担当させられたばかりに、調理のイロハを覚えてしまった小木曾鉄平二等兵だからこそできる資格といえる条件だったので、大衆食堂向け市民住宅入居は、無条件で小木曾鉄平幸子夫婦に与えられた特典といえる存在だった。

ただし、相手がお役所である限り、たとえ形式的だけであるにしろ入居の申し込みは必要である。その申し込みのために、小木曾夫婦は、市役所までやって来たのである。

以前のように住宅課課長席の前ではなく、住宅課窓口で申し込み書類に記入し、提出したところ住宅課職員は、申し込み者の氏名が小木曾鉄平であることを確認すると――。

それでは「大衆食堂の名称は鉄平食堂とされたらどうでしょうか？」と提案してきた。

正直言つて、その時まで小木曾鉄平は駆逐艦による生還から、農家小屋を借りての生活、山上の料理店での幸子とのお見合やら、総合結婚式場を目指す料理店でのつましやかな中にも盛大な結婚式と披露宴……忙がしいことばかりが続ぎ、人生の中で成すべきことの多くがこの時期に集中したような生活を送っていたので、「大衆食堂」の店名、いやゆる屋号まで考えるだけの余裕など皆無といえた。

だから住宅課職員が「それでは大衆食堂の名称は、鉄平食堂とされたらどうでしょうか？」と提案しても、とても自分のこととは考えられず、他人事の話のように耳に入っていた。

それでも時間が経ち冷静さを取り戻すと「鉄平食堂かそりゃあ悪くわいなあ。こいつはきつと当たるぞ」と思うのだった。

この時になると住宅課課長の方が小木曾鉄平たちの場所まで、席を立つてやって来ていて「鉄平食堂だったら名称の通りがよくて誰れにだって親しまれるよい名称じゃあないのかなあ！」とニコニコしていた。

住宅課長はニコニコしながら「鉄平食堂だったら、われわれもシツカリと応援させてもらいますよ」とも言つて、大衆食堂名は「鉄平食堂」に決まり〜といったニュアンスをしてみせた。

鉄平自身も「鉄平食堂」は悪いイメージではない、と思っていたので、改めて、どうして小木曾鉄平と自分が名付けられたのか、小学校時代に家族から聞かされていたいわれを思い返してみるのだった。

小木曾鉄平の生まれた時代は、富国強兵が強く叫ばれる国運にあり、鉄は何者よりも強いイメージを与えられていた。それでいて世の人々を平等に扱えるような人となつてほしい――との願いを込めての命名であつたらしかつた。

日本を代表するような鉄平の名が輝を放つて「鉄平食堂」の誕生となるのであつたとしたら、この上なく嬉しいことであると小木曾鉄平はその場で「それでは大衆食堂の名称は鉄平食堂といたしますので、どうかよろしくお願いいたします」と住宅課課長に答えてしまった――。

住宅課課長のニコニコ表情はます一方で、とてもお堅いお役所の課長とは思えないものづくりようであつてニコニコニコニコの繰り返しだった。

住宅課課長はただニコニコニコリしているだけでなく両手をパンパンとたたいて拍手を始めたとすると受付担当の職員もパンパンと拍手を合わせる。

他の住宅課内にいた職員も起立してパンパンパンと拍手の大合唱となつた。

この拍手の大合唱は「鉄平食堂を皆で応援しよう」とのメッセージでもあつたのだが後にそのメッセージどおり住宅課をはじめ都市開発部、市役所あげての「鉄平食堂」の支援の輪となつてゆくのであつたが、この時住宅課窓口に、市営住宅申し込みに訪れた市民の多くはまだ事情が分からず、

ただ「市役所にしては少し変だなあ。職員が拍手をして騒いでいる」としか映っていないかった。

時代の変わり目とはそうしたものである。何事か新しい風が起こり始めていても、一般にはただわあわあ騒いでいる、くらいにしか映っていない場合が多いのである。

やがて、その市役所都市開発部住宅課の市営住宅入居申し込みのために殺到し、窓口でわあわあ騒いでいた中の数人は、新築の市営住宅四十九戸の抽選会で見事当選し、晴れて市営住宅の入居者となつてゆくのだつた。

小木曽鉄平幸子夫婦が申し込んだ大衆食堂向けの市営住宅だけは、たった一戸でありながら、他に入居申し込み者は現われず、小木曽夫婦は、無抽選で入居を射止めた。

ただし、大衆食堂の営業が条件での入居であるだけに、入居とは、即大衆食堂の開業を意味していた。

うれしい事ではあるものの、この日を境に小木曽鉄平幸子夫婦には、急にあわただしくなり、生活が一八〇度転換することとなつた。

まず第一に、大衆食堂の開業だなどといったところで、客用のテーブルすらまだ用意できていなかったのである。

来客用のテーブルと、イスについては、住宅課が他の市営住宅新築分の資材の中から、小木曽鉄平の要望に叶つたように用意してくれることで落ちついた。もちろん、イス付きでの話であつた。

小木曽鉄平が、イメージしていたテーブルはたとえ木製であつても、何よりも頑強なつくりであ

ること。

それは、インドネシアでの行軍に際し昼食の準備中に、米軍から空襲を受け惨々な目にあつたことに対する教訓から、いかなる場合でも頑強な製品が一番と考えた末だつた。

住宅課は、この小木曽鉄平の要望に応えるだけのテーブル四卓を大衆食堂向けの市営住宅内に配置した。イスは、顧客一人に対して一脚ではなく、木製による長イスだつた。

「これだつたら、ひとつのテーブルを囲んで何人でも一度に食事をする事ができる」小木曽鉄平はそのように理解した。公園にあるベンチのように長イスだつたら、仲のよいグループなら、何人でも腰をおろして使うことができる。

不思議なもので、何の飾り気もないといつても、木製のテーブルが四卓と長イスが並べられたことだけで、にわかには小木曽鉄平が入居することになつた市営住宅は、立派な大衆食堂に变身を遂げたのだつた。

それも落ちこぼれではない、時代の最先端をゆく「大衆食堂」に化したのである。

小木曽鉄平はもちろん、幸子もそろつて「さあやるゾ。多くの人に助けられてこれまでやってこられたのだから、これからはこの大衆食堂を舞台に、多くの皆様方に恩返しをしてゆくんだ」と決意を再確認すると、胸の中から何やらファイトがどんどんとわき出してくることを感じた。

小木曽鉄平幸子夫婦にとって順風万帆といえた。

「市営住宅内の大衆食堂」の開業はこうして着々と準備が進むのだつた。

その時、また小木曾鉄平幸子夫婦（ゆきこ）に向かって新しい風が吹き始めていた――。

「作物をいくらでも提供するから」と強い助っ人を申し出ていた農家の主婦が、仲のよい主婦仲間を説得して、他の農家に対しても作物の提供を呼びかけてくれていたのである。

俗に言うところの「井戸端会議」を通じての説得だったのだけれども、会議に加わっていた多くの主婦が、「いいわ。それだったらうちも協力する。何といつても夢のある話だからね。私も少しは協力をしなくっちゃあ！」と農作物の提供を約束してくれていたのだ。

だから、世間の人は「井戸端会議なんて何になる、女性共が集まって長々と自慢話をしているだけじゃあないか？ そんな馬鹿げた井戸端会議などに参加していたのじゃあ時間の無駄というものだ」などと馬鹿にしていたのじゃあいけない――。

少なくとも、大衆食堂開業を間近に控えた小木曾鉄平幸子夫婦の暮らす都市の井戸端会議とは、実に成果のある会議であつて、どこかの国会のように、議案の否決された同一議案の再可決をはかつてガソリン税を復活させたことによりガソリン価格は以前よりも割高になってしまふ、といったダラダラ審議の結果として国民生活を困らせてしまふ国会よりも多くの成果を生んでいたといえるのである。

つまり、国会議員のセンセイ方よりも、井戸端会議に加わっていた主婦たちの方がよほど偉いのである。という事実こそここでよく覚えておいてほしいのである。

「井戸端会議」を馬鹿にはいけないのだ。

そして、小木曾鉄平幸子夫婦が大衆食堂としてすっかり準備の整った市営住宅に入居すると――。

「鉄平食堂は、いつから営業するのだ」とか「早く鉄平さんの料理を食べてみたいもんだわ」と「鉄平食堂」の開業を待ちわびる声が強くなった。

特に、抽選で市営住宅に当選し入居した新住民の間でその声が強く「近くに大衆食堂ができると聞いて楽しみにしていたのにねえ」と失望感する出る始末だった。鉄平食堂の早期開業は、何よりも急務なことといえたのだ。

幸いなことに、鉄平食堂で使用する皿や茶碗といった什器類については、山上の料理店女将が「他ならぬ鉄平様のためなら」としばらくは鉄平食堂のために貸してくれることになった。

「児童公園」からよく見える位置に「鉄平食堂」の看板も掲示できた。

ただし、大衆食堂そのものはまだ開業前なので「鉄平食堂」の看板は、公職選挙法の告示前の選挙事務所の看板のように白幕のベールでおおつて数日が経過するのだった。

そして、ベールは、イザ開業となつたその時、ぬいで「鉄平食堂」の看板は世に出る仕組となつていた。

「鉄平食堂」は市営住宅内での店舗であることから、ささやかではあつても市長などを迎えての、開業式典を催した後に営業開始することとなり、市役所内で総務部秘書課、住宅課で日程の調整がはかれ、その結果として『秋の佳き日』に開業式典が催されることに決定した。

「もくもくつ寝ると営業開始！」。小木曾鉄平幸子夫婦は、その時から指折り数えて鉄平食堂の看

板ベールをはがす日を待つようになった――。

小木曾夫婦だけではない、小屋を借りていた農家の主婦だって「もういくつ寝ると……」なのである。

鉄平食堂の開業に合わせて、収穫したての農作物を届ける必要があったからだだった。

以前小屋を借りていた農家の主婦だけではない、井戸端会議の議論に参加していた主婦にも農作物を鉄平食堂に提供する責任が生じていたので、時計の針は、鉄平食堂開業を目的にコチコチと回っていたようなものである。

といつてこの時代、物資の欠乏著るしくたとえ農家といえども、農作物を自由に移動させることは難かしかつた。米穀通帳が今日の年金手帳よりも幅を効かせていて、農作物、とりわけ稲作はたとえ一粒であっても自由に移動はできなかった。

とはいえ、大衆食堂にはどんなことがあつても応援すると、見栄を張った手前、農家の主婦は「鉄平食堂」開業に合わせてザル一杯のサツマイモを届けるのだった。

幸いなことに、その年の秋は好天に恵まれサツマイモは大きく育ってくれていた。

その中からザル一杯分を鉄平食堂の開業祝に届けたのだった。

井戸端会議参加の主婦もザル一杯のサツマイモを持参して市営住宅の鉄平食堂に届けたのだった。「これで鉄平食堂のメニュー（お品書）は決まった」。小木曾鉄平は、開業初日の料理として『蒸かしイモ』と決定した。

「蒸かしイモなんて主食ではなく、おやつじゃあないか？」などと言つてはいけない。米穀通帳が大手を振つて通用していた時代にあつては、お米はなかなか回つては来なかつたので、サツマイモにはそれ相応の価値があつたのである。

鉄平は、幸子に相談してみると「それでいい。蒸かしイモで十分だ」と同調が得られた。

同調が得られただけでなく、妻幸子は鉄平食堂のメニューが蒸かしイモだと決定すると「蒸かしイモ一本一円」「蒸かしイモ1/2五十銭」と毛筆でお品書きを書いて店内に提示したのだった。

その文字は見事なまでの達筆だった。それまで幸子は鉄平に一度も話したことはなかつたのに、花嫁修業のひとつとしてどこかの書道教室に通つて見事な毛筆を身につけたのだろう。

とにかく、幸子が見事なお品書きを書いて店内に張り出したことにより、開店準備中の鉄平食堂の店内は、にわかに大衆食堂らしくなるのだった。そしてそのお品書きを見る度に鉄平は、妻幸子の存在を有難く思うのだった。料理の腕には長けていても、何かと無器用な鉄平一人だったら、店内のムードはこれほどまでによくは、ならなかつたであろうとつくづく思う店主、鉄平だった。

こうして、鉄平食堂の開店準備は成果をあげ、いつ開店してもよい体制が出来上がった。

そんな時、小木曾鉄平当人ではない別のところで、鉄平食堂の開店日時が決められようとしていた。市役所総務部秘書課で、『市長』の都合に合わせて、鉄平食堂の開店式典を催したらどうだろうか？ というのであつた。

その結果、鉄平食堂の開店日は、秋の佳き日と内定した。店主となる小木曾鉄平に異存はなかつた。

開業式典は、市長の都合のよい日のことであり『市長』が出席して、鉄平食堂の船出を祝うことになった。

あわせて、市議会を代表して議長にも声がかけれられ、市議会議長も同席することが決まった。

こじんまりと開業して「あれっ、もう鉄平食堂を始めているぞ！」と市民の喜ぶ様を予想していた小木曾鉄平は「やれやれ、話が大きくなってしまったなあ！」と自分でも驚くこととなった――。

とも角、秋の佳き日に、鉄平食堂はスタートを切るようになったのだ。そして、そのうわさは、たちまちに市民の間に広まってゆくのだった。

「市営住宅内の大衆食堂、いよいよ開店するんだって」とか「どのような料理を食べさせてもらえるのか楽しみなことだわねえ」などとうわさ話は絶えなかった。

「人のうわさも七十五日」などと世間では言われるものの、その七十五日にならずして鉄平食堂は、開業式典を迎えることができた。

幸運にも、その日は朝から晴れ上がり、絶好の開店日和となった。式典の定刻前から、鉄平食堂のある市営住宅周辺には、行列ができ、目の前の「児童公園」ではブランコやスベリ台に乗って遊ぶ子どもたちのにぎやかな声がこだましていた。

定刻直前になると、まずあの宮司が現われた。小木曾鉄平の出征に際し、武運長久を願い、そして終戦直後には、幸子との結婚式で祭神を務めてくれたあの宮司である。

そして今また、鉄平食堂の開業に際しては商売繁盛の祈願をしてくれるというのである。

小木曾鉄平は、この人生の節目節目に神前に報告祈願してもらええる宮司が同一であることに、不思議な縁を感じるとともに、この宮司が祭主を務めるのであるなら、大衆食堂としての鉄平食堂は、市民に可愛いがられ、大当たりするだろう、ことの確信を深めるのだった。

少し遅れて、注目の『市長』が到着した。市議会議長は、市長より五分ほど遅れて式典会場の、鉄平食堂にやってきた。山上の料理店女将も応援にやってきてくれた。

式そのものはわずか、十分もかからずに無事に終了。次期市長選にも当選しなくてはならない『市長』は、小木曾鉄平をヨイショ！ と持ち上げる内容の濃い挨拶をして喜んでいた。

さあ「開店」の時間である。式典が始まると同時に、カウンター内の調理場では、店主小木曾鉄平がかまどに火を入れ、蒸しイモ作りに専念していた。丁度蒸し加減もよろしく蒸しイモが出来上がった。

顧客第一号となる『市長』が、木製テーブルの長イスに着座すると、妻幸子の出番となる。『市長』は料理の注文をしないというのに、小木曾鉄平の妻幸子は、皿に一本の蒸しイモを載せて『市長』の前に「さあどうぞ、お召し上がりください」と差し出す――。

鉄平食堂では、顧客からいちいち注文などする必要はなかったのだ。お品書は、農家の主婦によって届けられた農作物の蒸しイモ一品しか用意できなかったのだから、妻幸子は、注文をとることなく「市長さんだったら、蒸しイモ一本まるごと食べてもらえるだろう」と判断してテーブルに運んだまでのことだった。

ところが幸子(ゆきこ)は新妻としてまだ初初しかった。その上、自分たちの城が持てた感激があつて、最良の笑顔で、初めて見る『市長』に「どうぞお召しあがりになつて！」である。

印象として、悪いハズなどない。

顧客第一号となつた『市長』は「それでは味見をさせていただくとするか？」と言うが早いか。目の前に出された蒸しイモを二ツに折るのだった。

そして、まずは蒸しイモそのものが発するサツマイモ本来の独特の臭(におい)を確かめてみる。

「うん。これはいいイモだ」と言つた後で、やつと、蒸しイモそのものを口にしてみるのだった。

そして口から出た感想は、「うん。こりや美味い。」「美味い美味い」と連発して、一本の蒸しイモを平らげてしまうのだった。

米穀通帳が重宝され、米穀が配給制だつた時代には、『市長』といえども、お米の入手には困難をきたし、食糧には苦勞している時代といえた。

市内で収穫されるサツマイモは、いづれも最良品レベルの品ぞろいであるハズなのに、鉄平食堂開店初日に用意された蒸しイモは、鉄平の調理のよさに加えて、しばらく味わうことのできなかつた、「食堂という施設の雰囲気とピツタリ合致して、蒸しイモの味を引きだしてていたのだ。

それに幸子の笑顔が何といつても格別味を引きだしてていた。

そうしたことが総合的に重なつて、市長の「うん美味い」の感想となつたのだった。

しかし、さすがに『市長』の感想である。この感想が、ツルのひと声となつてスグに市民の間に、「鉄平食堂の料理は本当に素晴らしいのだった」「その味には、あの市長ですら、舌を巻いたつてことだよ」と大きな反響となつて市民の中を伝播して行つた。

こうして、鉄平食堂の開業初日は、式典に市長が参加したこともあつて、大成功を納めるのだった。

しかし、開店初日が成功したからといって、初日がよければ、全がよい、という訳ではない。どのような事業にあつても、成功時のピークの力をどれだけ継続してゆくことができるのか、ということの方にこそ、成功のカギは陰(かく)されているのである。

まさに、継続こそ力といえるのである。

では、鉄平食堂の運命は？ 唯一の売り物であつた蒸しイモを『市長』が「美味い美味い」と評価した話は、農家の主婦はじめ、井戸端会議で議論していた主婦の間にたちどころに伝わり、「市長サンが誉めたというサツマイモとは、いつたどの家で収穫したイモだったのかねえ？」と大きな評判を呼んでいった。

さらに、子どもたちの間では、「それほど美味い蒸しイモだったら、少しでいいから一度食べてみたい！」と話題となつていた。

つまり、市民の間では、会う人ごとに「鉄平食堂」「鉄平食堂」と挨拶が交わされることになつた。しばらくすると、もはや「鉄平食堂」を知らない市民はゼロといえるまでの知名度の普及といえるのだった。

幸いなことに、「鉄平食堂」の前は市が整備した「児童公園」であり、砂場があり、遊具としてスベリ台に加えてブランコまで用意されていた。

天気の良い日になると、児童公園にやってきてスベリ台やブランコで元気に遊ぶ母子連れが目立っていた。

子どもらが、遊び疲れると「鉄平食堂」のペールをぬいだ看板が目飛び込んでくる。

それに店内からは、プーンと蒸しイモのよい香が児童公園一帯にまで漂ってくる。

となれば、子どもたちの口から出る言葉は決まっていた。「母ちゃん、あそこに行つて食べさせて！」である。

時代がたとえどの様になろうとも、母親たちの考えることは、常に一様で「たとえ、自分はどうのように空腹であつても、この子にだけは、ひもじい思いだけはさせたくない！」と切に願うものである。

今、児童公園で遊び疲れたわが子が「蒸しイモが食べたい！」と望むのだったら、足は自然と「鉄平食堂」へと向うのである――。

小木曾鉄平の暮らす都市ではこうして、時間のある母子は「児童公園」に行つてスベリ台とか、ブランコで遊び、子どもが遊び疲れたら「鉄平食堂」に行つて、ひと休みさせてもらうというパターンが定着したのである。

「児童公園」で遊ぶということは『東京ディズニーランド』に連れて行つてもらふことと、同じく

らしい意味合いであり、子どもたちにとっては、最高の贅沢といえた。もはや「鉄平食堂」とは大衆食堂ではなく、子どもらにとつては最高の贅沢の場、といえた。大当りも大当りの「鉄平食堂」の経営といえるのだった――。

戦後の何もなかった時代のこととはいえ「児童公園」とセットになった「鉄平食堂」は市民に、心の栄養源を与え、市の発展に大きく寄与したことになる。

そして今また、「鉄平食堂」に新たな顧客集団が誕生してきた。

「私たちも応援しますから！」と豪語していた、市役所の都市開発部住宅課の職員が、お昼の休憩時間に「鉄平食堂」にやって来るようになったのだ。

住宅課に職員は五十人も在籍していただろうか？ その住宅課職員が次々と「鉄平食堂」にやって来るのだから「鉄平食堂」は、平日であつても大入満員の盛況が続いた。

市役所都市開発部住宅課職員の食堂化したような「鉄平食堂」には、農家の主婦たちが、その時々々の農作物を運んでくれてはいたが、「鉄平食堂」の大人が続けば続くほど農作物を運ばなくなってならない回数が増すこととなり、農家の主婦の一部からは、その量の多さに悲鳴が上がり始めた。

しかし、「鉄平食堂」は占星術の運に恵まれていたらしく、次なる、食材の提供者が出現をみるのだった。

この時の救世主とは、同じく市営住宅内で生計を立てていた、豆腐店店主で、豆腐製造の副産物である「おから」を「鉄平食堂」のために回してやろう」というのだった。

豆腐店にすれば「回してやろう」どころか、豆腐製造が増えれば、増えるほど「おから」が出てしまうことになり、その処理に頭を痛めていたところ、「鉄平食堂の店主は、料理の腕に秀れている」というので「鉄平食堂だったら、おから」の味を最大限引き出して満足いく商品にしてくれることだろう」と、「おから」を積極的に回す、決心をしてくれたのだった。

さて、おからを入手することのできた鉄平食堂の店主、小木曾鉄平は早速におから料理の試作に取りかかった。

何も食料のなかったインドネシアで一人半年間も生き延びてきた当時のことを回想していたとき、小木曾鉄平の頭には早くも「これだ」とのアイデアが生まれるのだった。

小木曾鉄平の頭に浮かんだアイデアとは、ただおからを供したのでは見た目に貧弱であるばかりか「何だ評判の鉄平食堂の味とはこんなものだったのか」との風評を呼びそうだったことから農家の主婦から提供を受けた大根と人参を千切りとしてまぶしたところへ、ほんの数滴の食酢を添加して味付けをした——おから料理だった。

創作者の特権で食してみたところ味は悪くなかった。次に幸子が試食したところ大満足で、「鉄平食堂の看板料理にしたらどう？」との提案だった。

この幸子の提案には鉄平自身も満足で「うんそうしてみよう。市営住宅の名物になるぞ」との喜びようだった。

これで「おから料理」は鉄平食堂の看板料理として翌日から早くも売り出すことになった。

すると、幸子は例によつて「おから一円五十銭」のお品書き短冊を、達筆な文字で書き上げて店内で、最も目に付く位置に張り出すのだった。

不思議なもので「おから料理一円五十銭」の短冊が一枚加わっただけで、鉄平食堂の店内のムードは一変し、品格が一段上がったかのように見えるのだった。

こうして新メニュー、おから料理が加わった鉄平食堂が一夜明けて開店してみると、来店客は一樣に、新メニューの「おから料理」を食してくれた。

昼時になると、「今日のお昼はどうするのだ」と執務時間中に話し合っていた市役所都市開発部住宅課職員が「鉄平食堂に行くに決まっているじゃあないか」とそろってゾロゾロと鉄平食堂にやって来た。

注文するのは、新メニューの「おから料理」に集中するのだった。

正直言つて、小木曾鉄平は「おから料理」がこれほどまでに人気になるとは思つてもみなかったのである。

さあ、そうなると鉄平食堂はにわかに忙がしくなる。調理場内はもちろん、調理場から客席まで「おから料理」を運ばなくてはならない幸子の忙がしきは「猫の手を借りたい」以上の忙がしきで、調理場、客席間を走り回らねばならないほどだった。

それでも、住宅課職員が「うん美味い。こりゃあ美味しい料理だ」と新メニューのおから料理を誉める言葉を客席のあちこちで聞くことによつて「よかった。他人様のためになつてよかった」と

の喜びに変わることによつて次のエネルギーを作り出しては頑張る幸子^{ゆきこ}だった。

開店時の蒸しイモ^{むかしイモ}は、市長の「美味しい」のツルの一声が評判となつて鉄平食堂を有名にした。次に小木曾鉄平の発案による「おから料理」は市役所職員がリーダーとなつて市内全域にPRしてくれるのだった。

この、お上^{かみ}であるハズの市役所職員による「鉄平食堂のおから料理は天下一品だ」とのメッセージの効力は大きく、鉄平食堂の人気を不動のものとするのだった。

「おから料理」の人氣が不動のものとなつてくると、鉄平食堂の客層に変化が生じだしてきた。新たに建設作業員、いわゆる土方と呼ばれた力仕事の労働者が「おれたちもひとつおから料理とやらを味わつてみたいものだなあ」と連れだつて鉄平食堂へやつて来るようになったのだ――。

そして「おから料理」を食べてみた一人の建設作業員は「これは確かに美味^{うまい}い」「これほど美味しい料理をただ食べていたのではもつたない。このおから料理を肴^{さかな}に酒が飲めたら、さぞやお酒も美味^{おい}しいことだろうなあ」と言つたことから、検討の末、鉄平食堂では以後、日本酒を出すことになつた。

とはいうものの日本酒を出すにはそれなりの手続きが必要なことから、スグにお出しします、という訳にはゆかなかつた。

それでも建設作業員から連日「おから料理でお酒が飲んでみたい」の連呼は続くのだった。そんな時、小木曾鉄平はいかにもスマなすうになつて「希望はよく承知いたしておりますので、も

うしばらくお待ち下さい」と謝まるのがやつとのことだった。数日すると、やつとのことのでその待ちに待つた当局からの許可が出た。

するとまたまた、幸子の出番である。

「日本酒二級一合十円」のお品書が鉄平食堂のメニューに加わつた。相変わらずの達筆であつて、これには店主の鉄平も幸子に二度惚^ぼれする結果だった。

こうして、鉄平食堂の新メニューとして、「日本酒二級一合十円」が追加された夜から、鉄平食堂には建設作業員が次第に集まるようになった。店主鉄平は「日本酒なんか出したら客層が低下して店の品格に傷がつくのではないだろうか?」と心配したものだったが、鉄平食堂に集まる建設作業員は品格がよく店内で暴言を吐^はいたり大暴れする客は一人としていなかった。

それというの「日本酒二級一合十円」を出すのに小皿にコップを乗せ、そのコップギリギリのところまで二級酒をサーブスしたところ、少しでも傾いて一滴^{ひとしほ}でも零^{こぼ}してしまつては、もつたない、と幸子が真剣になつて運ぶ姿が好感を呼んで、「何度も日本酒を運んでもらつては気の毒なことだ」と、いくらお酒が好きとはいえ、一合だけで済ませる客ばかりだったからである――。

酔いが回つて大暴れするだけの量を鉄平食堂で飲む例は、なかつたのである。

このために、「鉄平食堂は品のよい飲み屋さん」とのレッテルがもたえられることとなつた。

すると、市内の各家庭でも、朝出掛けに「今日は、鉄平食堂に寄つて一杯飲んでくるからな」と言う主人に、正面から反対する主婦はいなかつた。

「鉄平食堂に行くのだったたら安心だわ」と主婦層に思われていたためだ。主婦層からも歓迎された鉄平食堂での酒の肴はもちろん「おから料理」がもつぱらだった。おからの人気は最高潮に達した。

すると、そんな建設作業員の中から「鉄平食堂のおから料理は本当ほんとうに天下一品といえる。このおから料理を何とか昼にも食べてみたいもんだなあ！ 何とかひと工夫くふうしてはもらえんもんだろうか」とまたまた提案が出た。

小木曾鉄平はまたまた燃もえる時が来た。

「よし、それだったら、昼でもおから料理が食べてもらえるように考えようではないか？」と――。

その結果、小木曾鉄平は、油揚げの購入を考えついた。油揚げの中におから料理を詰めて携帯型としたらどうだろうか――考えたのだった。そして、農家に沢山保存されている、竹の皮を包装紙替りに活用すれば、おから料理が携帯型としてどこにでも持ち運びができる。

今日各地で人気を集めている『いなり寿司ずし』のようなものであった。

驚くなかれ、いなり寿司の元祖は小木曾鉄平その人だったのである。

こうして、建設作業員の要望から生まれた携帯型のおから料理を竹の皮に三個入りを一セットとして売り出したところ反響は抜群で「三個じゃあ足りん。今度は五個を包んではもらえんだろうか」と早くも次の注文が入るほどだった。

もちろん、翌日には、三個入りのおから料理と、五個入りのおから料理を用意して客席のテー

ル上に並べてみた。

イザこのように、今日で言うところのいなり寿司風にこしらえ、竹の皮に包んだおから料理の山を眺ながめてみると壮観だった――。

壮観ではあったものの、発案者の小木曾鉄平は、そのおから料理の山を見て心配のタネが生まれるのだった。

例によつて「果たして、こんなに調理してしまつてよかつたのかなあ！」「これほどの量が売れてゆくというのだろうか？」と売り上げを心配したほどだった。

ところが店を開いてみると「売れること売れること」。前日まで「これほどの量が売れるのだろうか？」心配していたというのに――。

早くも「もつと用意しておけばよかつたのになあ！」と、売れ過ぎて困る小木曾鉄平だった。

次の日も、また次の日も、天気さえよければ、携帯型けいたいのおから料理は売れに、売れてゆくのがあった。そして夜になれば、今度は、仕事帰りにチョット一杯と二級酒一合を飲みにもた建設作業員が集まつてきた。市営住宅の一角にある鉄平食堂はいつも大にぎわいで、鉄平はこの時、もうけにもうけた。一時の成金ではない。小木曾鉄平は大衆食堂という事業で成功したのである。

こうしていなり寿司の元祖ともいえる携帯型のおから料理が、売れに売れだすと、調理したおから料理の包みをいつまでも客席のテーブル上に築いておくという訳にもゆかなくなつた。

第一、客席に置いたままであつては、いかにも不衛生であつて、大衆食堂といえども好ましいこ

ととはいえなかった。

そんな時、妻幸子の頭にまたピンと閃めくものがあつた。いったい幸子の頭の中はどうなっているというのだ。

鉄平食堂がピンチに立つと決まったように何か考え出してくれるのだつた。

そして、幸子が考えた携帯型おから料理の販売方法とは――。

四方をガラス張りにした商品ケースを開発して、客はその中から、好きな料理を選んで自分で取り出してもらおうという、いわばセルフサービスのようなもので、今日の大衆食堂ではたいいてい採用されている一品料理の展示ケースを考案したのである。

この幸子のアイデアは的中して、注文した料理の商品ケースが出来上がってくると店内の一角に置いたところ、「こりゃあ便利だ。都合がイイ」とまたまた評判となつた。

店はますます繁盛という状況となつてしまつた。こうなつてくると、店主の鉄平と幸子の二人だけでは、とても手が足りなくなつてきた。正にうれしい悲鳴だつた。

このピンチを救つたのは幸子ではなく、幸子の妹である福子だつた。幸子には瓜二つの妹福子があつて、その福子が「鉄平食堂に行つて働きたい」と言い出してくれたのだつた。

幸子の妹だからといって、小木曾鉄平が無理に福子に頼んだのではない。

姉妹仲良く育つた福子は、姉幸子が鉄平の元に嫁いだからというもので、以前にも増して姉幸子の様子を観察していた。

その結果、幸子が実家に顔を出す度に精気が増し、女性らしさに一段と磨きがかかつてゆく姿を福子は見逃がさず、「どうしてお姉さんは年を重ねてゆくというのにあんなに瑞瑞しくなつていくのだろうか？」不思議に感じていたというのだつた。

その結果、姉の幸子は主人の鉄平と一緒にいることが何よりも幸福と考え、どんなにつらいことでも、鉄平と一緒にいたら乗り越えることができる、との信念を持つていた。

さらに自分がアイデアを出し、それが大衆食堂の発展につながり、夫の鉄平が喜んでくれることが、幸子にとって何よりもうれしい出来ごとといえるのだつた、その繰り返しが見事なリンクとなつて幸子を幸せへと導いてゆき、そうすることによつて幸子はますます瑞瑞しい女性へと変化してゆくことになつたのだ――と福子は解釈したのである。

そして福子の心の中には次第に「私も鉄平さんのような人と結婚がしたい」と願望が生まれ「鉄平さんのような人……」がやがて「鉄平さんと結婚がしたい」と福子の気持ちはますます熱くなつてゆくのだつた。

と、いつて鉄平には姉幸子が嫁いでいるので、福子の夢は泡となつて空中をさ迷うのだつた。そんな時である「鉄平食堂が人手がなくて困つている」と知つた福子は、「これは天が与えてくれたチャンス」と鉄平食堂の賄として働きに出る決心を固める福子だつた。

鉄平食堂で働くということは、ただ労働をするのではなく、人気商品のある鉄平食堂で調理を通して、鉄平食堂の味を覚えられるという特権をもつ。

『それだったら、花嫁修業にもなる』ということで周囲も大賛成してくれた。

やはり、鉄平食堂の人氣が、そうさせてくれたのだろう。そのように感謝する幸子の妹福子だった。「まあ、給与のようなものは払える食堂ではないものの、どうしても来てもらえらというのだったら、妻の妹のこともあり、無下に断わってしまったては気の毒というもんだ」と、福子さんには、しばらくの間、鉄平食堂の賄いとして働いてもらうことにした鉄平だった。

幸子の妹、福子が戦力の一員として鉄平食堂に加わると、鉄平食堂の雰囲気はにわかに変わり、客層にも変化が生じた。

幸子は鉄平の嫁として、鉄平食堂に出ていることは、多くの客が知っていた。

ところが、新しく戦力に加わった福子は当時まだ一人身、つまり独身だったことから「俺の嫁さんにどうだろうか？」と花嫁捜しに血道を上げる青年が鉄平食堂の新たな客となつて連日のようにやつて来るようになったのだ。

そんな青年たちの目の前であつても福子は実によく働いてくれた。コップから、今にも溢れてしまふのではないかと思われるほどの日本酒二級一合を客席まで運ぶ姿は生々しく、どの青年の目にも「三國一の花嫁」になれると映つた。当の、福子はそんなことは一切気にすることなく、せつせと次の客に二級酒一合のコップ酒を運ぶのだった。

もちろん客の酒の肴は新調されたばかりの商品ケースに収納されている「おから料理」だった。「おから料理」は、客が各自、商品ケースから取り出してくれるので、福子の出番ではなかつた。

こうして、福子は喜んで、連日のように鉄平食堂に手伝いにやつて来てくれた。

しかし、その福子に今度は、鉄平の方から「頼むから、これからも食堂の方を手伝ってはもらえないだろうか？」と頼まなくてはならない日がやつて来た――。

幸子が結婚をし、お腹がどんどん大きくなりだしてきたためだった。

幸子にもやつと、女性としての幸せを実感する時がやつてきたのである。

お腹が大きくなった、幸子はもう鉄平食堂に出ることなどできなくなつてきたのだ。

どうしても、福子の力を借りなくてはならなくなつた。とはいえ、福子も幸子以上によく働いてくれたので、鉄平食堂の繁盛はまだまだ続くのだった。

そうした繁盛をする中、これまでの鉄平食堂とは、明らかに客層の異なる客が毎日やつてくるようになった。どうやら、福子が目当てではない様子だったものの、その客は毎日「おから料理」を食べにやつて来るのだった。

料理人の小木曾鉄平は「こりやあどうも本当におからが好きな客のようだ」と思つてしまうほどだった。

しかし、毎日やつて来るその客は「おから料理」が好きで鉄平食堂に通つて来るのではなかつた。

ある夜、他の客が居なくなると「私はこういう者です」と一枚の名刺を出し出すと、その名刺には、勤務先の金融機関名が印刷されていて

「毎日のようにこれほどの客があるのだったら、さぞかし日銭^{ひげん}がたまることでしょう。お金を家に置いておくということは、防犯上好ましくありません。どうか当組合に口座を開設して預金をしてはいただけませんか？」

現金は係の者が必ず集金にやってくるので、お願いします」というのだった。

何のことはない！ 預金の勧誘だったのだ。だから毎日のように鉄平食堂の客となってやって来ては、セールのチャンスを狙っていたのである。

毎日通つてくれる金融機関の職員があまりにも熱心だったことから、小木曾鉄平は、組合職員に勧められるまま、やがて組合に預金口座を開設した。

すると、約束どおりに組合から担当者が毎日、鉄平食堂に日銭^{ひげん}を集金に来るようになり鉄平食堂の預金通帳の残高はグングン成長を続けた。それは市民が、鉄平食堂を愛していた証ともいえた。

福子が賄^{まかない}に来てくれたお陰で、鉄平食堂の安泰の日は続き、臨月が近くなると、幸子はもう食堂をのぞくことすらできなくなり、初産にそなえて産婦人科へ入院、待望の赤ちゃんの誕生を待った。

金融機関の職員が、鉄平の見知らぬ男性を連れて食堂にやって来たのはそんな時のことだった。

小木曾鉄平はその時、「さては、福子の結婚相手にどうだろうか、福子に紹介したくて連れて来たのだろう？」と思つたものの、その男性が鉄平食堂を訪ずれた理由は福子に会うためではなく、店主の小木曾鉄平に話があるとの本旨に、鉄平は苦笑いしたものだ。

ところで、金融機関職員が連れて来た男性というのは、同じ金融機関で働く職員だった。しかも

担当は融資の専門ということで、この際色々と検討をした結果、「鉄平食堂様には、何としてもお金を借りてもらつて有効に使つていただきたい」。早い話が融資させてほしい、との要請だった。

だが、今の小木曾鉄平には、お金を借りなくてはならない理由など存在しなかった。

そりゃあ、幸子が入院しているの、子どもを出産すれば、それなりに入院費用は必要となろう。しかし幸子の入院費用など、日銭^{ひげん}でたまった預金通帳から払い戻しを受ければすむことであつて、特別に融資を受ける必要など全くなかった。小木曾鉄平は一旦は断わろうとしたものの、とりあえずは、産婦人科に入院している幸子に相談してから返事をしよう、と見舞いを兼ねて産婦人科に、幸子を尋ねてみると、胎児の成長はすこぶる正常で、出産が間近に迫っていることをうれしそうに告げた後で幸子は、

「今は店の経営が順調で、金融機関からお金を借りる必要はないかもしれない。

しかし、縁^{よすが}”というものは大切で、融資担当の金融機関の職員の方が、お金を借りてほしいと要請されるのだつたら、借りられる時に借りた方がよいのかもしれないよ」と言うのだった。

この、幸子の回答は、鉄平にとつて、あまりにも意外だった。それでも熟考した末、幸子のことも考えてやらんといかんなあ！ と思うように傾いた小木曾鉄平は、金融機関の融資担当職員に、「お金を借りたいので、よろしく頼みたい」と答えてしまった。

この時、必要でもないお金を借りることになった小木曾鉄平は、このお金によって人生の歯車が大きく狂い出すことになった。

鉄平食堂の経営は順調で、日銭はほとんど金融機関の組合に入金されていた。その実績からみて、今後さらに成長してゆくと判断した、組合の融資担当者は、小木曾鉄平が予想していた金額よりもはるかに高額、それは小木曾鉄平が予想した金額の十倍にも相当する融資をもってきたのである。

「こんな大金借りてしまつて大丈夫なのだろうか？ それでも、まあ幸子が借りておけというのだから、それに従おう」と小木曾鉄平は、はからずも大金を手にすることができ、一時の「大金持ち気分」を味わえることとなつた。

すると、たとえ一時的にはあつても大金持ちとなつてみると、不思議なもので大金持ちとなつた喜びよりも、

「これほどの大金を手元に置いておいたら危険だなあ」といつた防犯上の心配の方が増してきた。

といつて、また金融機関の預金口座に預金してしまつたら、今度はその十倍もの融資をされかねない——。そんなことになつたら、ますます大変なことである。小木曾鉄平はこの時、鉄平食堂の料理とか経営の悩みではなく、「大金の使い道」について頭を悩まさなくてはならなくなつた。

「お金の使い道」について悩むとは、まことにもつてぜいたくな悩みだったが、それも時代の風とあつては、誰れもその風に逆うことなど不可能といえた。

この時、いくら困つても、小木曾鉄平は今度は妻、幸子には相談をしなかつた。

もし、幸子にそのような話をしてしまつたら、身重な幸子は、鉄平以上に悩むこととなり、胎児

に悪影響を及ぼす危険があつたからである。

困つた小木曾鉄平は、金融機関の融資担当者に、悩みを打ち明けるのだった。

本当は、「もうこれ以上、私に融資をさせないでください」と申し出る予定だつたところが、鉄平の悩みを聞いた融資担当者は

「それでしたら、土地、つまり不動産を購入されておいたらいかがでしょうか？」と土地の購入を勧めてきた——。

金融機関の融資担当者は、ただ融資の相談に応じるだけでなく、融資したお金についても、その用途についてのアドバイスをしていたのである。

それで融資を受けた小木曾鉄平は、とりあえず、融資担当者が勧めるままに、土地を購入する決断をした。

金融機関の融資担当者は、購入する土地として二カ所を示してきた。どうやらすでに土地所有者から、「どこかにいい値で買ってもらえる人があつたら、売つて欲しい！」との依頼を受けているらしかつた。

とりあえず、小木曾鉄平は、金融機関の融資担当者が示した、二カ所の土地の下見をしてみることにした。

ところが、二カ所の土地を下見して驚ろいた。二カ所ともが雑草がボウボウとはい繁つた荒地であつて、しかもとてつもなく広かつた。

「いつたいこんな荒地を買ってどうなるというのだ！」と思つてはみたものの、やはり手元に、大金を置くことは危険である。

それでも小木曾鉄平は、金融機関の融資担当者が勧めた二カ所の荒地あれちを購入した。

産婦人科医院にいる妻、幸子には「とんでもない荒地だったけれども、二カ所とも買ってしまつた」と事後報告をした――。

すると、幸子は怒るところか「貴方がお決めきになつて購入されたのだつたら、私は何も申しません。私は、貴方の妻ですから、貴方のされることに反対などいたしません」と従つてくれた。

今度は大金持ちから、たとえば荒地ではあつても「大地主」となつたことがよほどうれしかったのだろう。

報告を受けた翌日、幸子は、無事第一子を出産してくれた。玉のような男の赤ちゃんだった。

長男の名前については、産婦人科医院の病室で小木曾鉄平・幸子二人で協議の末、時代ときの風ふうに恵まれてゐる鉄平の平の字を活かして『一平いつへい』とすることにした。

赤ちゃん誕生の知らせを聞いて、産婦人科医院にやつてきた、幸子の両親にその話をする、「よかつた。よかつた。とにかく無事でよかつた」と喜んでくれた。

鉄平食堂で一人働く福子にも、赤ちゃん誕生の知らせは伝えられた。福子は、姉幸子の子が「一平」と名付けられたことに満足した。未だに料理人鉄平に思いを寄せているだけに一平の名が気に入つたのだろう。

母子ともに無事ということで、まもなく退院許可が出ると、三人は鉄平食堂のある市営住宅に帰つてきた。

二人ではなく、今度は三人での帰宅となつた。さあそうなると、にぎやかなこと、にぎやかなこと。鉄平食堂は、オギヤー、オギヤーと元気な一平の鳴き声が聞かれるようになった。

もつともこの時期、つまり一平の出生当時は、後に団塊だんかいの世代などと呼ばれる出生ラッシュで、市営住宅は、どこでもオギヤー、オギヤーの鳴き声が聞かれ、毎日「鳴き声コンクール」が開催されてゐるのではないかと、と誤解されかねない時だった。

オギヤー、オギヤーと鳴き声の止まない、鉄平食堂は、相変わらずのにぎわいようだった。働くことに幸福を感じる、福子は、グチを言うことなくやつて来てくれた。

幸子にとつても幸いなことであつて、鉄平は、二人の間の「姉妹愛」の素晴らしさを目の前にするのだつた。それは、本当に幸福なひとときだった――。

幸いなことに一平には、何の障害もなく、スクスクと成長を続けた。戦前だつたら「見事な帝国軍人となつて、この国を勝利に導いてくれることだろう」と大いに期待もされたことだろう。

幸か不運なことか？ この時、この国はすでに戦争の永久放棄を憲法で定めてしまつていたので、この先たとえ一平が立派な青年に成人しても「軍人」となる術はなかつた。

もし、どうしても軍人になりたいのだつたら、渡米するなり韓国籍を取得するなど、徴兵制のある国に帰化して多様化する国際社会の中で徴兵に応じ紛争の最前線に立つ方法などに限られてしま

この先どうなるのか分からない一平は、鉄平食堂の奥でただオギャー、オギャー鳴き続けているだけだ。しかし、父親となった鉄平は、成人はともかく、わずか数年先のことは読んでいた。

「一平はもちろん、この市営住宅の中だけでもこれだけの、子どもが出生したのだから、目の前の児童公園は大にぎわいすることになるだろう？　すると、うちの鉄平食堂もにぎやかになるぞー」と。

事実、鉄平が見通していたとおり、児童公園はやがて、幼児のにぎやかな声でいっぱいになるのだったが、当面のところは、鮮魚の動きが活発になってきた、というので魚料理を鉄平食堂のメニューに加えることになった。

魚料理といつても肴にピッタリといえる煮魚一品を専用皿に盛って、例の商品ケースに収納してみることもあった。

煮魚の商品ケースに出したところが、一杯飲み客がどつとおしかけるようになった。「おから料理」よりも、煮魚がチョッピリ上品に映ったのだろうか？

相変わらず、建設作業員は鉄平食堂に通うこととなり、福子がコップ酒を「どうぞ」と客席に運ぶ回数も増えた。もう福子は賄いなどではない、一人前の店員として立派に成長していた。

いつしか、そんな煮魚メニューを求めて一風変わった客が、鉄平食堂の常連客となった。

一風変わった常連客とは、建設作業員とは明らかに違う、事務系の会社員らしい、それも「女性」

だった。どこか大会社に勤める月給取りではないのか？

初めは一人で来店した、その女性客は、先客の建設作業員がするように、商品ケースの前までスルスイスと歩いて行き煮魚を一皿取り出すと、空いているテーブルに持ち帰り、というよりも、鉄平食堂には珍しい、若い女性客だったことから、先客の建設作業員がわざと、空席をつくり「さあ、こつちに来い。こちらが空いているので、ここに座ったらどうだ！」と席を設けてくれたのだ。

事務員風のその若い女性は、煮魚の小皿を持って「それじゃあ、オジさん頼むわ。仲間にしてね！」と用意された空席に座るのだった。——さては、次には「お酒を一杯」などとコップ酒を注文するの？　と思いきや、若い事務員風の女性は、なかなか日本酒を注文しなかった。建設作業員が「こりゃあ残念なことだなあ！」と思っていると、その事務員風の若い女性は煮魚にハシをつけ一口口にしたそのトタンに、事務員風の若い女性は「こりゃあ美味いわ」と感想を発した。

調理場で、そのひと声を耳にした小木曾鉄平の喜びはひとしおだった。

どのような名のあるグルメ評論家などではない、ごく一般的な市井の事務員風の若い女性が「美味い」と評してくれたことは、料理人としての小木曾鉄平にさらに自信を持たせ、料理人のプライドを満足させたひと声だった。

だが、その時はまだ小木曾鉄平は気付いていなかった――。

戦争が終わり、時代は若者たちを求めており、たとえ一杯たりとも日本酒を飲まなくても、居酒屋などに立ち寄り、肴だけを食することが、時代が求めている晩酌のスタイルであるということ、

鉄平食堂の一品料理煮魚を「美味い」と食した、事務職らしいその若い女性は、次の日もまた、鉄平食堂に顔を出した。もちろん晩酌のために立ち寄ったのである。料理が美味しいのだから、明日もまた「今晚は」と顔を出す！

しばらくすると「鉄平食堂には、毎晩のように若い娘がいるぞ」と評判が立つ。

今も昔も、若い娘の集まる店には後を追うように青年層が仲間入りをしてくる。

鉄平食堂にも青年男子が出入りするようになりいつそうにぎやかさを増すのだった。

オギヤー、オギヤー奥からは相変わらず、一平の元気な鳴き声が聞こえてくる。

事情を知らない青年男子は、鉄平食堂によく出入りしている、事務職の若い女性に、それと分かるように「あの娘の子じゃあないのか？ 赤ん坊がいたのじゃあ働きに出られないものだから、鉄平食堂に赤ん坊を預けておいて、ああして毎晩のようにわが子の様子を見に来ているのだ！」などと醜聞を立てる者まで出てくる始末。

冗談ではない。赤ん坊がいたのならこの先お嫁に行けなくなってしまう。オギヤー、オギヤー鳴いているのは店主とその妻との間に生まれた子であって、毎晩晩酌にやって来るからといって、事務職らしい若い女性の子ではないのだ。

肴を一人つつついている若い女性はまだ娘であって、赤ん坊などいないことが分かってくると、やっと、ひと安心する男子青年が多かった。「自分にも、その女性と結婚するチャンスがまだあったからである。

結婚するかどうか、まだ不明だったものの次第に顔見知となってくると、事務職の若い女性は、男子青年が鉄平食堂へやって来ると「今晚は」と声を掛けては「今晚も一杯やっていくの？」と、福子に代って客の相手をしてくれるようになった。鉄平が頼んだのではない。店の雰囲気は自然とそうさせたのだった。

男子青年は、日本酒のコップ酒を注文すると、「どうだ。肴の代金は俺が持つから、ここに来て一緒にテーブルに座らんか？」と早速にアクションを起こす。

若い男と女である。誘われて悪い気などしない。事務職の女性は、青年男子の横の席に座ることとなる――。

二人のテーブル位置はその夜だけでなく、次の晩もさらに次の晩も続くことになる。すると、もう完全に福子の出番は無くなってしまう。

その頃になると、福子の元にも縁談があり福子は、結婚への道を行って行った。

「これまで本当によくやってくれたのに、恩返しもできないんだ」と小木曾鉄平は、福子の花嫁道具を持たせて「門出を祝ってやった」のだった。

「こんなことまでしてもらえとは思わなんだ」と福子をはじめ、両親共々喜んだ。

それに、姉の幸子は「妹の花嫁道具を持たせてもらえたので、福子もきつと満足してお嫁に行けることだろう。ありがとう貴方！」と、福子以上に鉄平に感謝するのだった。

幸子の妹福子は、鉄平食堂の味を嫁入りの土産としただけでなく、花嫁道具という、目に見える

『型あるもの』まで小木曾鉄平から持たせてもらったのだった。

オギヤー、オギヤーとしきりに鳴くことが仕事だった、一平はいつの間にかヨチヨチ歩きをするようになり、時には食堂の方にまでサッと来ては、客の姿を見るとニコッと笑って見せるようになった。子どもの成長は本当に早いものだった。

客が大入りのところを見て、ニコッとするとところなど、一平は生まれながらにして大衆食堂の「店主」としての資格を有しているように映った。

福子に代わって一時期鉄平食堂の店員のように注文をとって来ていた事務職の女性も出世したのだろう。

時には同僚と思われる仲間と連れだってやって来る日が目立つようになった。

そんな時は、青年男子の横に座りはしない。食卓を挟んで二人で向き合うようにしてテーブルに付いた。

二人だったら肴も二皿食べてくれると思っていた鉄平の予想は見事ハズレてしまい。

出世したであろう女性は、同僚の分も含めて煮魚の小皿を一皿取っただけで、二人の間に、その煮魚を置いて「この煮魚は本当に美味^{おい}しいよ」と二人、仲良く一匹の魚をつつくのだった――。

話しているのは職場内のグチなのか？ それとも男性のうわさ話なのか？ 鉄平には内容は分かんなかったが、二人は長い時間話を続け魚の身を見事なまでに食べ尽くしてしまった。頭と骨ばかりとなってしまった魚を見たら野良猫でも「そうまでして食べなくてもよいものを！」とガツカリ

したことであろうに。

しかし、野良猫と違い、小木曾鉄平はうれしかった。「料理人としての腕がよかったからこそ、ああまで見事に食べてもらえたのだろう」と思えたからである。

「それにしても、近頃の娘はシツカリとした者よのー」とも思った。何しろ二人してやって来たというのに料理は一品だけ食べて帰ってゆく^{かど}のだから、その賢^{かしこ}さというのか堅^{かたじけな}実^{じつ}性^{せい}には舌を巻くものがあつた――。

その事務職の女性は「たとえ出世はしてもお金は無駄なところに支出はしない」ことを信条とでもしているのだろう。

課長になつても、部長になつても支出は極力ひかえる人生を送ることだろう、と鉄平の心に強く教えるものがあつた。

そして時はドンドンと過ぎ去って行った。一平が小学校に入学する春となると、贈られて来たランドセルを背に、一平は食堂に見せびらかすように登場しては喜んでいた。団地の子には、児童公園が遊び場だったのに、一平にとつて遊び場とは鉄平食堂そのものだった。「この子は将来いったいどのような子になるのだろう？」

子どもというものは、可愛い。可愛いと言っている間が花であつて、小学校に入学すると「やれ体育大会だの」「今日は学習発表会（いわゆる学芸会）だよ！」と行事を繰り返している間に時間^{とき}はあつと言っている間に流れ去って行った。

鉄平食堂は相変わらず繁盛を続けていた。その間も、一平の保護者会が開催されれば、幸子が必ず小学校まで出向き、担任教諭から一平への指導方針など、シツカリと相談してきてくれた。

この幸子の熱心さがあって、一平は小学校六年間、ズ〜と成績は上位を占めていた。

このために、学習発表会では『王子様』など常に大役を演じることが目立った。一平の出番となる時間は、あらかじめ分かっていることから、出番近くなると、市営住宅の大衆食堂を抜け出して一平の演じる『王子様』を見物する鉄平だった――。

鉄平が学習発表会の会場である小学校の体育館にかけつけると、ステージでは立派に成長した一平が中央になって「皆の者、出発だ。準備はよいか？」と『王子様』役を見事に演じていた。本当は、ラストステージまで観賞したいところだったのに、鉄平は急いで市営住宅のわが家兼大衆食堂に帰った。

大衆食堂の店主に戻った鉄平は妻幸子に対して「今からだってまだ間に合う。お前も早く行って見てこい」と一平の晴れ姿をひと目見ておくよう勧める鉄平だった。

それに高学年になると、一平はかけ足が早かった。このために体育大会には、短距離競争でいつもトップでゴールにかけ込んだ。

小学校を代表して、市内の小学生記録会などに出場すると「鉄平食堂の子が出るのじゃあ一等は決まったようなものだなあ」ともつばら市民はうわさし合った。

このたのもしい一平の小学校卒業が近づいた頃、鉄平食堂に一大事が起こった。

市役所の都市開発部が、市営住宅の建て替え計画を立案し、入居者は一時、市営住宅の立ち退きを迫られたのである――。

終戦直後の資材不足の中建てた木造市営住宅が古くなったことと、市にはまだ他から転入者が続いているので、住宅不足は解消していないので、市営住宅を高層化に建て替え、そうした転入者の流入に備えようとの考えだった。

建て替えに当たっては、現在の入居者を最優先して入居、利用してもらうので、計画に賛同して欲しい、市役所都市開発部は入居者に優利な条件を示し、立ち退きを迫った。

しかし困った問題が出た。鉄平食堂の存在である。もともと、大衆食堂を経営してほしいとの条件付きで入居した小木曾鉄平・幸子だったが、市役所都市開発部の計画では「大衆食堂だったらもう他にもたくさん出来た。何も市営住宅の、団地の中になんか、大衆食堂なんか無くてもよいのじゃあないか？」との意見が大半に達するようになった。

しかし都市開発部住宅課からは「もし鉄平食堂が、これまでどおり市営住宅内で営業したいとの意向が強いのだしたら、その実績からみて考えを改めてもいいのじゃあないかなあ！」と鉄平食堂継続すべし！の声もあった。

市役所都市開発部や住宅課のプランを聞いた小木曾鉄平は「市役所のごダゴダに巻き込まれるのは嫌だ」と鉄平食堂の営業継続案は否定した――。

そして以前、大金の使い道について相談に応じてもらえた、金融機関の融資担当者に相談したの

だった。

金融機関の融資担当者は、丁重に小木曾鉄平を迎えて、真剣になって話を聞いてくれた。話を聞き終えた、金融機関の融資担当者は、しばらく考え込んだ後、

「それでしたら、いつそのこと、小木曾鉄平様、アパートでも新築されたらどうでしょうか？ まだまだ転入者が見込めるのでしたら、アパート経営は、もうかりますよ。そのアパートの一階で、鉄平食堂を営業されるのであれば、これまでの市営住宅内のように大繁盛をしますよ！ 幸いなことに、小木曾鉄平様は、アパート建設にピッタリの土地を所有なさっているではありませんか？」と答えを出した。

「土地を所有なさっている」と聞いた小木曾鉄平だったが――。

以前、金融機関から融資を受けた時、大金の使い道に困ってしまった折に、荒れ地を購入させられていたことを思い出した。

その何にもならないと思っていた土地、つまり荒れ地に、今アパートを建てるとの金融機関からのアドバイスが下りたのだった。

金融機関の融資担当者はさらに話を続けて「最近になって、荒木工務店という業者が設立されました。代表の荒木光男氏は、まだ若い青年だけれども、建築に対する情熱は人一倍強い物を持っているので、いい仕事をしてくれることでしょう。そして小木曾鉄平さんどうかどんどうけて下さい。私たちは小木曾鉄平様にもつとめと稼いでいただきたいのです」と、それこそ熱っぽく語った。

「こんな大切なことは、幸子にも相談せんといかんなあ！」とその場合は、それまでとして、小木曾鉄平は金融機関を後にした。

それから一日置いた次の日、まだ幸子と相談した結果が出ていないというのに、鉄平食堂に、金融機関の融資担当者が、一人の青年を連れて、やって来た。

その青年こそ、日本の近代建築は俺たちの手で担うのだとのエネルギーに満ちた荒木光男青年、荒木工務店の代表者その人だった。

「どうかよろしく願います」と挨拶する荒木光男青年を見た幸子は「この人だったら間違いない。この人に任せてみよう」とインスピレーションが走った。

これで何もかも決まった。小木曾鉄平幸子夫婦は、かねて所有していた荒れ地にアパートを新築し、そのアパート一階で食堂経営を継続してゆくことになったのである。

アパート建築に限らず、あらゆる工事を着手するには、まず神事をとり行う。

小木曾鉄平幸子夫婦のアパート建築は、担当することになった、業者の荒木工務店（代表Ⅱ荒木光男氏）によって神事が執り行われた。

神事は、降神の儀によって始まる――。

何でもなかった荒れ地に、まず神様をお迎えするのである。神様がやって来られたところで祝詞が告げられる。小木曾鉄平がアパートを建てなければならなくなった理由を神様に報告して、さら

に大衆食堂の経営が安泰であるよう、神様に祈っておくのだ。形式的なことでもあり、神事は無事に終了した。

神事を終えると、翌日から早速、アパート建設は始まった。

イザ、自分たちのアパート建設が着手されると、小木曾鉄平は驚いた――。建設作業現場に行ってみると、必ず代表者の荒木光男青年がいて、陣頭指揮をとっていたのだ。

作業は、監督など、現場責任者に任せておけばよいのに、荒木光男青年は、現場で、自分より、年配の監督に対して、図面を示しながら、あれこれ指示を与えていたのだ。

「さすが金融機関の融資担当が連れて来ただけの人材だ」とその場で感じた小木曾鉄平は「これだったら伸びるぞ。新興ではあっても、荒木工務店は、今後グングンと、急成長してゆくだろう」と思い、そうしたもろもろのことを見通した上で、アパート建設を決断した、幸子もスゴイと、わが妻の実績をかみしめた。

代表者が現場に張り付いているものだから従業員たちも、働かない訳にはゆかない。少しでもサボっている、余裕などなかった。

アパートは、予定どおりに建設作業が進み、こんな荒地地がいつたい何になるんだ！　と思っていた土地に、半年もすると見事な城が完成した。

アパートの名称は、荒木青年をひと目見て、建設を決めた、幸子の名にちなんで『幸^{みゆき}アパート』とし、他の一棟は『幸^{みゆき}アパートⅡ』と命名した。鉄平食堂は、その名も「レストラン鉄平」に改め

て幸^{みゆき}アパートの一階に設けた。

レストラン鉄平、と改名こそしたものの、鉄平食堂時代の客が、どつと流れて来て利用してくれた。それだけではない。レストラン鉄平には「ウチで建てさせてもらったアパートだから」と、荒木光男青年が毎日やって来てくれた。しかも荒木光男青年は一人だけではなく、いつも一人や二人従業員を伴ってやって来ては「どうだ。美味^{おい}しいだろう。味が評判の店なんだからな！」とレストラン鉄平のPRまでしてくれるのだった。

それだけではない。荒木工務店代表者の荒木光男青年は、「アパートの入居状況はどうだのん。もし入居者がなくようだったら、うちで社宅として一括借り上げて使ってもよいから、心配なんかせんでおりん」とまで言って、小木曾鉄平を安心させた。

一方、建て替えとなつた高層の市営住宅はいえ、以前の入居者は立ち退^{おち}きに当たり「皆様方には優先して入居していただきます」との説明だったのに、

「市営住宅としての公平性を保つために皆様方にも、いちおう抽選に参加していただきます。当選された方に入居していただきます」と、市役所都市開発部住宅課の態度は一変した。

「抽選に当たらずに、市営住宅には入居できなくなってしまう」ので、以前の入居者は一斉に怒^{おこ}った――。

抽選会場の一角では、以前の入居者が住宅課の担当者を「やい、こっちに来て」と呼びつけて、今にも襲いかかろうとする、暴行寸前のシーンまで見られた。

「市営住宅はその後どうなっているのだろうか？」と高見の見物に来ていた小木曾鉄平は、怒る（とう）というよりも市役所住宅課に、騙（だま）されてしまった、市営住宅の以前の入居者に対して、「いいよ。いいよ。心配しなくていいよ。その気があるのだったら、幸（みゆき）アパートを使（つか）ってもらおうので、どうか安心して幸（みゆき）アパートの方（かた）に来ておくれん」と入居を勧めた。

「そうだったのか。あの鉄平食堂の主人はアパート経営にのり出されたのか、鉄平食堂のアパートだったら安心だよなあ」という訳で、荒木工務店に『社宅』として利用してもらわなくても、幸（みゆき）アパート、幸（みゆき）アパートともに、即満室の人気ぶりで、多くの人をガツカリもさせた。

一方、中学校に進級した一平は、頭のよいことに変わりはなく、いつもクラスのリーダー的存在（そんざい）だった。

しかも、スポーツ万能で、中でもテニス部では頭角を現わし、各種大会に参加しては優秀な成績を納めていた。いわばカッコイイ中学生だったので、女子生徒、憧（あこが）れといえた。

そんな女子生徒の憧（あこが）れである男子生徒一平について、ある日、担任教諭から「一平君について話がある」と連絡があったので、「いったい一平が何（なに）をしたというのだろうか？」と、心配した、幸子が中学校に行ったところ、担任教諭は、「生徒の進路志望についてアンケートをとったところ、一平君は高校に進学するのではなく『調理師学校に行く』とハッキリ明言したんですが、お母さんご存知だったのでしょうか？　そして一平君の調理師学校希望は賛成しますか？　それとも反対でしょうか？」との相談だった。

わが子一平が、調理師学校に行くことを希望しているとは幸子にとつて初耳（はつみみ）だったものの、調理師学校に行けば一平はやがて調理師となつて「レストラン鉄平」を継（つ）いでくれるものとばかり判断した、幸子はうれしくてたまらなかつたものの「主人とよく相談をしてから、また来ます」とだけ回答して学校を出た。幸アパート内のレストラン鉄平に戻つた幸子は、中学校の担任教諭から聞いてきたことを、鉄平に詳しく話した。

すると、鉄平もまた「一平は、調理師となつて、このレストラン鉄平を継（つ）いでくれる」と判断して喜んだ。

その夜、鉄平・幸子夫婦は、長男の一平に対して「どんなことをしてでも応援をするから、調理師学校に行つて、勉強をしなさい」と告げると、一平も自分の希望が通つたと喜んだ、それは、幸せな、幸せな小木曾家の夜だった――。

春になると、見事調理師学校の、入学試験に合格した、一平は、中学校の同級生に「一平君だったら大丈夫だろうけれども、世間に出ると競争が激しいというから、頑張つていい調理師になれよ」と励まされて、中学校を卒業し、自分で選んだ、調理師学校に通うようになった――。

うれしくなつてくると、次第（しだい）に気の大きくなる、小木曾鉄平だった。

思えば、よくもまあこれまで、大病（おほいざ）を患（わづら）うこととか、ケガをすることなく成長をしてくれたものだ！

鉄平食堂から、レストラン鉄平と名を改めた、店内でもの想うことが目立つ鉄平だった。

この「よくもまあ、これほどまでに成長してくれたものだ」との想いは、妻幸子にとつても同じだった。

相変わらず、レストラン鉄平の店内はにぎわっている。そんな時、客から「この店も安泰だねえ。何でも息子さんが調理師学校に通っているというのじゃあないの？ 調理師となつて、後を継いでもらうことになったら、老後は左うちわで暮らしてゆけるのじゃあないの？」などとうわさ話をするようになる、血相を変えて「俺たちは、何も老後の面倒を息子にみてもらおうなどと思つてはいない。息子なんかあてにしておらん」と幸子と共に否定してみせる小木曾鉄平だった。

そんなこと断言してしまつて大丈夫なのかなあ！ と客が心配しだした頃になつても、小木曾鉄平は「息子の世話にならん」と涼しい顔をしていた。

そんな時、「ホイっ大変なことになつたゾン」と血相を変えてとび込んで来た客が荒木工務店の荒木光男社長だった。店主の方はいたつて冷静であるのに、来店客の方が「大変だ」と血相を変えている、とは変なことであるのだが、仕事で市役所へよく出入りしている荒木光男社長によると、市役所都市開発部で今、都市計画の策定作業が進められていて、幸アパートと幸アパートII一帯には、都市計画道路の予定地に含まれているのだそうだ。そんなうわさが、都市開発部計画課でささやかれていたというのである。

だから、「うわく都市計画道路になつたらどうなるのだろうか？」と荒木工務店で施工した、幸アパートそしてレストラン鉄平の心配をする荒木光男社長だった。

市営住宅ではない！ 自分たちの物件である幸アパートの立ち退き目前となつた小木曾鉄平であつた。

しかも、今度は自分たちのことを考えておればよいのではない。幸アパートの経営者となつた今、今度は入居者の移転先のことまで考えなくてはならなかつた。アパート経営者とは、家賃収入があつていいなあ！ とばかりはゆかないのだ。『店子』のことまで考えなくてはならない。「店子は子どもも同然」との社会通念があるので、入居者に一方的に明け渡しを迫ることは無理な話だった。

しばらくして都市計画の骨子案がまとまると、市役所都市開発部計画課による、正式な説明会が開かれた。

計画案によると、小木曾鉄平の土地所有面積は、広大なことから、二カ所とも都市計画道路の予定地がかかることになつた。幸アパートの立地場所にも、都市計画道路は通る予定だった。心配していたことが、現実の姿として示されたのだ。

市役所都市開発部計画課の説明は続いた。

「この計画は、本市の十年先の発展を考へて立案したものであり、都市計画道路はどうしても必要だ。やつて来るであろうクルマ社会に対応するには都市計画道路はなくてはならない。みな様方のご理解と協力を求めます」とのことだった。

色々言つたところで、将来何にするとか目的があつて購入した荒れ地ではなかつたではないか。代こそ替わつているとはいえ、金融機関の融資担当者から、勧められたから購入した二カ所の土

地だった。だから小木曾鉄平としては、いつでも手放していい、土地だったのだ。

それを今、都市計画道路のために、市役所が欲しいと言っている。小木曾鉄平に異論はなかった。幸アパートのある幸子とて同じ意見であって、反対ではなかった。

しかし小木曾鉄平には困った一点があった。もし、このまま市役所に、都市計画道路用地を売ったり、幸アパートの移転補償費をもらってしまつたら、小木曾鉄平はまたまた大金持ちになつてしまふのではないか？

再び担当者の替わつた金融機関の融資担当者を探ね、相談した結果――。

「それでしたら、マンションを建てられてマンション経営をなさつたらどうでしょうか？」

「市民の大半は今中流意識を持っております。中流意識の市民は、上流志向が高いのです。ですから、アパートよりもより高級感のあるマンション入居を希望しておられることでしょう。すぐに満室となりますよ。もちろん建設資金が不足のようでしたら、一生懸命に努力させていただきます」との話に、小木曾鉄平は「それだつたらいけるかもしれない」と思い、いったん帰つて、幸子に相談してみた。

幸子はまたまた賛成してくれたので、小木曾鉄平はアパートに替つてマンションを建てることになった。幸いなことに購入した荒地は二カ所とも広大だったので、都市計画道路分を売却しても、なおマンションを建てるスペースは十分にあつた。マンションを建設すれば、小木曾鉄平の老後は正にバラ色で心配など無いと思われていた。

一平は、予定どおりに調理師学校を卒業すると鉄平・幸子夫婦の元に戻つて来てくれる、と言つてくれたので正に、小木曾鉄平は百万歳といつたピークに達した。

マンション建設は、荒木工務店だけではあまりにも大規模であることから、金融機関が中央の大手建設業者を見つけてきて、大手業者と荒木工務店のジョイント工事、共同企業体によつて施工されることに決定した。

しかし、いくらジョイント工事ではあつても、荒木工務店が中心になつて進行させてゆくことに変わりはなかつた――。

スツカリ仕事に脂の乗つた荒木光男社長は、マンション建設でも、現場の第一線に立つことが多かった。その甲斐あつて、マンションは計画どおりに作業進行し、完成した。

マンション名については、幸アパートの前例があるので、『幸マンション』と『幸マンションII』にしたいと鉄平が提案すると、幸子は、大いに喜んだ。幸マンションの一階には「レストラン鉄平」が控えていた。

山上の料理旅館が新築して、総合結婚式場になつたのはその頃のことだったが、鉄平に「板場の責任者になつて！」と、要請はなかつた。

料理旅館の女将が、鉄平食堂の繁盛ぶりや幸アパート、さらに幸マンションの建設、完成のうわさを聞き「鉄平様はきつと大忙がしのことだろうから」と、気を利かせて料理長の話を持つてこなかつたのである。

調理師学校を卒業した長男一平は、調理師の免許を取得して、帰ってきたので、市民がうわさをしていたとおりにレストラン鉄平は、一平が継いでくれることになった。

さらに、うれしいことは続くもので、レストラン鉄平の店主となった一平は、「この女性などどうだろうか？」と花嫁候補者を見つけてきて、小木曾鉄平・幸子の両親に紹介した。「ようもまあ、これほどの娘さんを見つけたものだ」と二人に、異論はなかった。

一平夫婦の結婚式は、山上に完成した総合結婚式場で催すことに決定した。

小木曾鉄平・幸子の二人にとって、それもうれしいうれしいことだった。自分たちが結婚式を挙げた、思い出のある山上での結婚式は格別といえた。

もちろん幸マンション内のレストラン鉄平のにぎわいは続くのだった――。

しかし、一平が店主となって嫁をとってしばらくすると、幸子が体調の不良を訴えるようになった。

それより半年も前にレストラン鉄平に来た市役所都市開発部計画課の職員が「これからは国民皆保険の時代が始まる。個人事業者は、市の国民健康保険に加入するように」勧めたので、鉄平は家族全員を国民健康保険に加入させていた。

併せて、健保加入と抱き合わせになっている『国民年金』にも加入させた。この都市では、国民年金は、保険料ではなく、市条例でもって『国民年金保険税』と定めて徴収に当たった。

健康保険料より『国民年金保険税』は高かったが、保険料ではなく『保険税』という名の税金であることから、「お上のすることに逆らったら罰が当たる」とばかりに小木曾鉄平は、国民年金保

険税の、納付通知書が届く度に、必ず、国民年金保険税を納めてきた。

小木曾鉄平の老後は、正に鉄壁といえた。

国民年金保険税は納付している上に、幸マンションと幸マンションII入居者からの家賃収入だつて、キッチンと転がりこんで来るハズだった。

ところが、転がったのは、運の悪いことに幸子の方だった。

体調がよくない、と訴えたのに放っておいたところが一向に改善に向かわない。

新規に加入していた市の健康保険証を初めて使ってみる決心をして、市立総合病院に行つて診察を受けたところ、それまで聞いたことのなかった病名の「がん」が発見された。それも相当に進行しているがんだつた。

医師からは「どうしてこれほどになるまで放っておいたのだ。きつと日常生活をしていく上にも影響があったことだろうに！」と心配して付き添って行つた、鉄平に対して言うのだった。

そう言えば、市役所では、例年「住民検診」を実施しており、受診者が少ないので受診するよう再三にわたつてお知らせのあったことを鉄平は、市立総合病院の診察室で思い出すのだった。

市役所の「住民検診がある」といつても、レストラン鉄平があまりにも忙がしいことから、幸子は一回も住民検診を受けていなかったのだ。幸子だけではない、鉄平だつて住民検診会場には一回も行ったことはなかった。

それが、体調不良を訴えた結果、市立総合病院のお世話になることとなり、受診の結果「がん」

が見つかったのだった。

もつとも、当時は「がん」などという病名は、まだ一般化しておらず『悪性腫瘍』との表現が学会でももつばらだった——。

回診の医師や看護婦が「悪性……。悪性……。悪性……。悪性……」と口に行っていることを耳にした小木曾鉄平は「これはいかん」と思う一方で「もしかすると、幸子はそのまま死亡してしまうのではないだろうか？」と最悪の場面を、想定してしまうほどだった。

「たとえ一日でもよいから、どうして店を臨時閉店にして、幸子に住民検診の機会をつくってやらなかったのだろうか？」その時になつては、もう「たった一日だけ」のことが悔まれてならない、料理の名人小木曾鉄平だった。

数カ月すると、その悔まれてならない日が現実のものとなった。入院加療の成果はなく最愛の妻幸子は亡くなってしまったのである。享年五十二歳だった。

幸子の死亡診断書を作成することになった医師は、「いや本当に残念でしたねえ。悪性腫瘍は、若い方ほど進行が早いのです。ですから、私たちの力ではどうにもならない、現代医療では、若い方の悪性腫瘍の進行を止めることは、不可能なんです。せめて患者さんの苦痛を少しでも和らげることしか手段はないのです。その点については、出来る限りの努力を施しました」と説明したかと思えば、

「それにしても残念でしたねえ。若い方でしたので、悪性腫瘍の進行が早かったのですが、もう少し早く、受診されていたら、悪性腫瘍の進行過程が、詳しく確認できて医学界の発展のために貢献されることになったのに……。医学界にデータを残さず亡くなられたのは残念です——。」

と医師は、幸子に死そのものを惜しむのではなく、学会での発表データが得られなかったことを悔しがるのだった。

「それにしても若かった。気の毒なことでしたねえ」と言った医師は、次には教誨師に早変わりして、「人の一生には、もともと労働量が定められております。若い頃に無理をして過重労働してしまうと、持ち分の労働量を、大量消費してしまつたことになります。だから、長生きはできません。反対に、若い時代にダラダラとした生活をして、あまり働かないでよくと、労働量が他の人より余つてしまいますので、年をとってからでも、働かなくてはなりません。一生の間に与えられている労働量がまだ未消化だからです。」

こういう方は、長生きできません。しかも亡くなる寸前まで働いて、労働量をスッキリきれいになくしてしまわなくてはなりませんので、こうした方の一生は大変なことですよ」と小木曾鉄平に告げた。「それにしても幸子は五十二なんかで死んでしまつて気の毒なことだつたなあ！」と鉄平が、夫として妻に、住民検診すら受ける機会を与えてやらなかったことに悔んでいると医師から早変わりした教誨師は続けた。

「この方（つまり幸子患者）は、むしろその労働量を、五十二年間で見事に使いこなされたのですから、満足な人生だったのではないのでしょうか？ 私は、羨ましい方だと思いますよ」と、慰さめ

られもした、鉄平だったが「何が、羨やましいものか、五十二歳じゃあ、幸子はあまりにも気の毒なもんだ」と悔みきれなかった――。

鉄平だけではない。親せきや、知人友人など周囲の人も、みんな口を合わせたようになって、「気の毒だった」「五十二歳なんかで亡くなってしまふなんて幸子さんは本当に気の毒だった」と悔んでみせてくれた。

しかし、本当に気の毒だったのは、さつきと夢の国に行ってしまった幸子などではない。ただ一人、幸マンションに残ることになった、鉄平こそ気の毒な人その人だったのである。

元氣な時代には「息子の世話になどなるものか！ 息子に面倒なんか見てもらおうと思つてはおらん」と客の前で豪語をしていた小木曾鉄平だったが、年をとつてからのマンションオーナーは見かけによらず、大変な仕事だった。

幸マンション、幸マンションⅡともに人気がよくことから、常に満室で、新規に入居者を募集する必要などなかったのだが、シッカリした入居者だけに、家賃使用料は毎月キッチンと支払つてくれた。

しかし、ごみ収集日の分別の徹底から、消防署からの防火査察の実施、さらには、防犯上の注意と、オーナーには、しなくてはならない雑用が山のようにあつた。

とにかく、マンション内のことはどのような小さなことであっても、オーナーに持ち込まれたのである――。

このような時、幸子だったら解決策は、素早かつた。女性の業とでも言つたらよいのか世渡りの術を心得ていて、ポンポンと難題を処理してゆく例が多かつた。また幸子は、それを楽しんでいくかのような女性だった。

その常に頼りになる連れ合いの幸子はもうこの世にいなかった――。

料理人としての腕がいかに優れているようにも、小木曾鉄平は、男性でござる。

とかく男性とは、世渡りが下手な人種といえる。サラリーマン時代など、会社人間の多くは、居住地近くの「近所づきあい」すらあまりしてはいない。だから会社では、エリート出世した男性ではあつても、定年退職になると、家の中で何もすることがなく、社会問題化しつつあるのが現実である。

小木曾鉄平のような個人営業店の経営主にとつて、定年という定めはないものの、鉄平のように、一人残されてしまうとマンション内のゴタゴタについて処理は頭の痛いところといえる。

それでも、一人となつた当初はまだ気も張つていて、よかつた。

小木曾鉄平は九十年代となると身体の衰を感じ、マンションを所持しているそれも二棟も管理するには苦痛を感じるようになった。

幸マンションも、幸マンションⅡも、いずれは、長男の一平に譲るべき物件だったことから、生前譲与、の道を選んだ――。

幸マンション、幸マンションⅡともに幸子の記念碑的なマンションといえた。それをたとえ、わが子とはいえ譲り渡してしまうことに、一抹の寂しさはあつた。しかしマンションオーナーとして

の雑事からサツパリ解放されたことで、小木曾鉄平には、しばらく味わったことのない爽快感があつた。

『これでこそ、長生きができるというもんだ』と喜んで、数日たったところが――。

一平夫婦が鉄平の部屋にやって来たのでいったい何事か？　と思つてみると、

「親爺は一人となつてしまったことだし、老人ホームにでも行つたらどうか」と一平が切り出した。そりゃあ元気な頃には「子どもの世話にはならん」と豪語していたものの、せめて同居くらいはさせてくれるものと思つていた。

それが、マンション二棟の所有権を渡したとたんに「老人ホームに行け！」とはシヨックだった。嫁はさらに熱心で「幸いなことに近く特別養護老人ホームの『西の舎』ができるというから申し込んでおくといいよ」と入居先まで指定してくるのだつた。老人ホームに行くには、民生児童委員に話してみるといいというので、嫁は、民生児童委員に連絡して、マンションまで連れて来るほどだった。

「エイッ、息子夫婦とこれ以上話だつて仕方がない」と観念した、小木曾鉄平は、近くの禅寺の住職のところまで遊びに出掛け、住職に身の上話をしたところ――。

話を聞いた住職は、「まあ、それも生まれた時から決まっていた運命というものだろうから」と、特別養護老人ホーム『西の舎』入居を勧めた。

「こんなことだつたら、もし俺が死んでも息子たちは、墓も建ててくれないことだろう。ましてや墓前での供養など望めなかつた」点についても、住職に打ち明けた。

「今だつたら墓地の分譲をしているので、自分の分だけでも購入しておきなさい」と墓地の購入を勧めた。「これで、墓さえ、建てていただけたら、私共で永代供養を致します。」との住職の言葉を聞いたその足で小木曾鉄平は、石材店まで行き、「もし死亡の連絡があつたら、禅寺の墓地に墓を建ててもらいたい」と注文して、代金も支払つた。

これで、特別養護老人ホーム『西の舎』入居の準備は整つた！

西の舎入居には、一平夫婦が付き添つてくれた。

幸マンションにある、レストラン鉄平を臨時休業してのことだつたが、特別養護老人ホーム西の舎は、入居に当たつての健康状態を掌握をする必要から、鉄平を医療機関まで連れてゆき、健康チェックの後、診断書を西の舎に提出しなければならぬ理由があつたからである。

と、同時に「たとえマンションではあつても九十代になる、男を一人暮らしさせておくことには不安がある」ことから、一平と嫁は「一刻も早く、鉄平を特別養護老人ホーム西の舎に入れたかった」のだ。

父親の鉄平さえ、特別養護老人ホーム西の舎に入居して一生を、西の舎で暮らしてくれたのなら、一平夫婦は、二人してレストラン鉄平で安心して働くことができるので、レストラン鉄平は、今以上に繁盛させることができる――思惑から、店を休業にしてまで、医療機関の受診と、特別養護老人ホーム西の舎入居に、付き合つてくれたのだつた。

年末だというのに、比較的気温が高く、雨降りの朝だった。

医療機関での受診の結果は、レントゲン写真、医師による診察ともに、小木曾鉄平の身体に異常は、発見されなかった。

特別養護老人ホーム西の舎には、即入居が決まった。プライバシー保護のために、特別養護老人ホーム西の舎は、完全個室制が採用されていて、小木曾鉄平に与えられた部屋は、三二二号室だった。小木曾鉄平にとって終の家となるであろう、三二一号室とは、エレベーターホールの正面に位置し分かりやすい場所にあった。

三二一号室の位置がただ分かりやすい場所にあっただけでなく、三二一号室の右横は共用のトイレであり、反対の左横にはお風呂があるという場所だった。

しかも、介護員の詰所である介護ステーションにも近く、最良の部屋といえるのだった。

不動産会社の売り出し広告だったら、さしずめ「優良物件」であって「早い者勝ち」ともいえる部屋といえた。

小木曾鉄平は、入居に当たって特別条件をつけるとか、要望はしなかったのに、その優良物件の三二一号室が、終の家として用意されていたのだ。

出迎えた介護員に案内されて、小木曾鉄平が三二一号室に入ってみると――。

介護員がまず、小木曾鉄平に対して一礼してから「私たちが、これからの生活の世話をさせていただぎますので、どうかよろしくお願いをいたします」と挨拶したのには小木曾鉄平はまず、驚ろ

いて「これなら、これからの生活も悪くはないな!」と思った。少なくとも、一平夫婦に権利は渡したとはいえ、かつてはオーナーを務めていた「幸マンション」の一室で肩身の狭い思いをして過ごすことよりも、「私たちがシツカリとお世話させていただきます」と言う介護員に守られて、特別養護老人ホーム西の舎で生活する方が、よほど人間らしく暮らせるだろう! と思う小木曾鉄平だった。

三二一号室に入った小木曾鉄平が、まずその三二一号室を観察してみると、ホテルの客室のようでもあり満足するのだった。

ホテルの客室が与えられた上に担当の介護員が付くのだったら、利用料が多少割高であっても、それは納得できる範囲内のことだった。

ところが三二一号室という、特別養護老人ホーム西の舎の客室には、時計というものが置いてはなかった――。

三二一号室だけではない、特別養護老人ホーム西の舎では客室という客室のどこでも時計は装備されてはいなかった。

小木曾鉄平はかつて、こんな話を聞いたことがあった。

それは、幸福な暮らしを願う人だったら誰れでもが行ってみたいところ。

かといって今スグには行きたくないところ、『天国』の話であって――。

『天国』には時間がない、という話だった。時間がないのだから『天国』では、一日の労働時間は

八時間だの、午前七時には起床とか、午後九時になつたら就寝する、といったことをいちいち気にして生活する必要はない。

だから『天国』に行くとき計など必要ない、というのだった。

さらに驚くことに『天国』には時間がないのだから、一日は二十四時間という計算も通用しない。一月が三十日とか三十一日ではなく、昨日の続きが今日であつて、今日の続きが明日という感覚だけである。

一年が三百六十五日なんて考えてみることもない。

一年なんて何日でもよいのであつて、一年が三百六十五日なんという定義は存在しない。

『天国』というところは、いくらたつても歳はとらない！ 世界だという。

だから、五十二歳で他界してしまつて、世間から「気の毒だ。気の毒だったなあ」と言われていた小木曾鉄平の妻幸子は、五十二歳のままで永遠に歳はとらないといえる。

もちろん百歳という長寿を全して天国に行つてしまつた、お爺ちゃんだつて天国ではもうそれ以上歳はとらないのである――。

「それだつたら、児童虐待で五歳とか三歳で殺されてしまつた子はいつたいていどうなつてしまふの？ 五歳や三歳じゃあ一人では生活してゆくこと大変なんじゃあないの？ 大丈夫かなあ」などと現世的に考えてしまふ方が多かろう――。

しかし、心配は全く無用。『天国』には祖父母や、さらにそのご先祖様がいらつしやることを忘

れてはいけません。

それに近所の方々だつて大勢行つておられるのですから「あそこの家の子か？」と近親観をもつて迎えてもらえるのです。

五歳児とか三歳児でしたら可愛い盛りですから、多くの方に支えられて生活してゆける、というものなのです。

ということ、天国に行つてしまつた児童虐待による殺害児のことは心配ないのですが特別養護老人ホーム西の舎で時計のない三二一号室の住人となつた小木曾鉄平はいえは幸いにも、日常的に使つていた目覚まし時計を身の回り品の一部として持参して来たので問題はなかつた。

その目覚まし時計にしたところで、介護員は「ちよつとチェックをして来ますから」と三二一号室から一旦持ち出すと、介護ステーションで乾電池を新品と交換した上に、時計の長針と短針をグルグル回して、JST（日本標準時）に合わせてから、三二一号室の小木曾鉄平の前に出して「どうぞこれでお使いになつても大丈夫ですから！」とチェックが完了したことを念を押すのだった。「私たちがお話をしますから――」とはこういうことだったのだ。

一平やその妻だつたら、こうした細かい点にまでは注意は払つてもらえなかつたのではないか。

特別養護老人ホーム西の舎とはよいところだなあ！ 小木曾鉄平はつくづく思うのだった。『天国』は天国でも、ここにはまだ時間の価値が存在する天国であつて、特別養護老人ホーム西の舎は、時間のない『天国』ではなかつたのだ。

他の入居者はともかく、小木曾鉄平は目覚まし時計持参で、特別養護老人ホーム西の舎の住人となったので、しばらくの間は、時計のない国には行かずにすんだ――。

かといって、特別養護老人ホーム西の舎の住人となった、小木曾鉄平は枕元に目覚まし時計を置いてはおいたのに、その目覚まし時計を、実際にジリジリと鳴らして使うことはなかった。

目覚まし時計ではあっても、ただ「今は何時なんだ」という時間の確認をするためだけに使う、特別養護老人ホーム西の舎の住人小木曾鉄平だった。

だいたいの場合に於いて、小木曾鉄平たち九十代にもなるお年寄りには、目覚まし時計をセットしておかなくても、太陽が東の空から昇れば、目が覚めてしまうものなのである。

そして太陽が一日の役目を終えて西の空に沈んでゆけば「ハイ、それではサヨウナラ」と休む習性を持つている。それもただ「ハイ、サヨウナラ」だけではなく「今日も一日どうも有難うございました」との感謝の気持ちで床に就くのである。

一世紀前まで、多くの日本国民は、そうした習性を身につけていた。だから目覚まし時計など不必要な時代が長く続いた。

とにかく、小木曾鉄平は目覚まし時計をアテにすることなく、特別養護老人ホーム西の舎での生活を送った。

すると、特別養護老人ホーム西の舎の生活サイクルが自然と身につけてきた。
特別養護老人ホーム西の舎の生活サイクルとは、

午前七時四〇分前後に朝食、

昼食は正午から

午後六時から夕食、

この間、午前十時と、午後三時にはおやつタイムがあつて、各自好きなお茶を飲んで談笑する。演歌や楽器演奏、朗読会から理容、美容といったボランティアがやって来るので参加することができる。

世間では「迎春準備で忙がしいなあ」などといっているのに、特別養護老人ホーム西の舎では実にノンビリとしたもので、「これでお正月がやつて来るのだろうか?」と思われていても、やはり時間だけは通り過ぎてゆく。

大晦日おおみそかの夕食、つまり十二月三十一日の午後六時になって、小木曾鉄平がいつもの食堂に行つてみて驚いた。

その日の夕食のメニューは、何と「年越ソバ」が用意されたのである。それもドンブリに入らないジャンボサイズのエビ付、つまり、「エビ天」による年越ソバだった。特別養護老人ホーム西の舎に入居して、これほどの料理が出してもらえらるとは想像すらしていないことだったからである。

「特別養護老人ホームも悪くはないなあ!」としきりと感心する小木曾鉄平だった。

そして一夜明ければ「新年明けまして おめでとうございます」である。

午前七時四〇分に運ばれてきた朝食は? 一般家庭並みとはゆかないものの、栗キントンとかコ

ンブ巻きの付いたおせち料理だった。

「お雑煮はお昼に！」とのことだった。

それも、お年寄りの体調のことを考えて、全員にという訳ではなく、「お雑煮を食べることのできるお年寄りだけは一カ所の食堂に集められた。

小木曾鉄平は九十代とはいえ体調はよかったので、「お雑煮の出る食堂」に行った。

年越しソバに、おせち料理、さらにお雑煮と食べたところで、世間並みのお正月ムードを感じる小木曾鉄平だった。

夕食には、みかんが丸々と一個ついた。テレビは、見ても見なくてもイイような正月特有のバラエティー番組ばかりである。

さあ二日の朝食は？ またまたおせち料理で正月ムード満点といえるのだった――。

それやこれやで、世間の正月休みなどはすぐに終わってしまうというのに――。

それからもズくと特別養護老人ホーム西の舎では正月休みのような日が続くのである。

「今日は仕事初めだ」などとテレビのニュースが伝えても、特別養護老人ホーム西の舎の正月休みは続くのである。

となれば、小木曾鉄平はそのまま時間のない国に行ってしまうのだろうか？

大きなエビの乗った年越しソバをもう何回食べたことだろうか？ 小木曾鉄平は、幸マンションから持参して来た身の回り品の中に愛用のハーモニカのあったことを思い出した。

そしてある日の午前十時のおやつタイムが終了すると、一人三二一号室で、その愛用のハーモニカを取り出してみた。

あつた。あつた。古びてはいるものの、若い頃から愛用していたハーモニカが一本出て来たので、まずは音試しをしてみた。

プー、ハーと色よい音が発したので、「これなら十分だ」と思った小木曾鉄平は一曲演奏してみた。

曲は、青春時代のヒット曲から『ああそれなのに』が十八番といえた。

「空にや今日も アドバルーン さぞかし会社で今ごろは お忙がしいと思うだに ああそれなのに 怒るのは 怒るのは あつたり前でしよう」との哀愁に満ちたあの曲だった。

思えば戦時中はインドネシアまで出征し、お国のためにと働いた。

戦後は、鉄平食堂経営で、ひと山当てた小木曾鉄平だった。「老いても息子の世話になどならうとは思ってはいない」と考えていた。

しかし、その息子夫婦から「特別養護老人ホーム西の舎に行け！」と宣言された時は本当にショックだった。

だから『ああ それなのに』なのである。

小木曾鉄平の演奏するハーモニカには愁が十分であつて、どこかアコーディオン演奏のようにも聴こえる。それも三二一号室で生演奏しているのではなくCDでもかけている名演奏だった。住人の小木曾鉄平はCDをかけている訳ではなく、生演奏、それも愛用のハーモニカを演奏しているの

だった。

特別養護老人ホーム西の舎のような平成の長屋には、よく民生児童委員が視察にやって来ては入居者の日常生活を観察してゆく。

三二一号室から流れて来る『ああそれなのに』のメロディーを聞いた民生児童委員の一人が小木曾鉄平が一人個室で演奏しているのだと知ると、「これほどの音色を個室で演奏しているだけでは、もったいない」と、ハーモニカともども小木曾鉄平を食堂に連れ出してしまったのだ。

この日小木曾鉄平は、特別養護老人ホーム西の舎の名プレイヤーとして、食堂でコンサートを開くハメとなってしまうのだった。

演奏曲目は、もちろん十八番の『ああそれなのに』である。特別養護老人ホームの住人入居者の多くは、住みなれた家に居られなくなり入居して来た人ばかりなので、会場からは合唱が始まる空にや 今日もアドバルーン さぞかし会社で今ごろはお忙がしいと思うだにああそれなのに……住人は人生の鑑かがみのように考えたのだろうか？ いつになく大声で歌った。籠かごの鳥のアンコールも出た。しかしこれには小木曾鉄平の方がついてゆけずに、会場の方から、合唱が始まると、やつこのとでプーハー、プーハーとハーモニカで追う小木曾鉄平だった。そんな時の小木曾鉄平は、料理人としての顔ではなくNHKホールで演奏しているオーケストラの一員であるかのような顔をしてプーハープーハーしており、内心満足した表情となっていた。こうして特別養護老人ホーム西の舎は今日も、NHKホールに早変わりをして一日が過ぎてゆくのだった。

そんな平穏な日日がどれだけ続いたことだろうか？ 小木曾鉄平の身の上に嫌なことが起こった。歌謡番組などを流しておいてくれたらしいTVが、連日のように「消えた年金」問題を伝えるようになってしまったことだった——。

冗談じゃあない！「将来のために」と納めていた『年金』が国「社会保険庁業務センター」の不手際ふてぎによって、誰のものか特定できない年金が五千万件も発生してしまった、という驚くべき事実だった。

もし、自分の年金であるというのだつたら当時支払った保険料の領収書など、証明できるものを示せ、というのだ。半世紀も前に支払ったことを証明することは容易なことではない——。

こんな場合、五十二歳で死去してしまった妻幸子だったら、一年ごとの領収書をキッチンと整理して保管しており、社会保険事務所まで出掛けてゆき、窓口の係官の前に「これでどお？」と領収書の束を示して『証明を勝ち取る』だろうに！と思うと、小木曾鉄平は切なくてやりきれなかった。幸いなことに、小木曾鉄平が『国民年金保険税』として納めた年金税は、業務センターに記録されており、宙に浮いた年金にはならずすんだ。

小木曾鉄平は、幸マンションに戻って保管してあるのかどうか分からない領収書を捜さなくてもよかった。

しかし『ああ それなのに』怒るのは 怒るのは当つたり前でしよう小木曾鉄平はハーモニカ演奏を続けるのだった。

消えた年金問題がまだ全国的には解決していないというのに、TVは新たな嫌なことを伝えた。七十五歳以上を対象とした『後期高齢者医療保険』制度の創設だ。

もちろん、九十代的小木曾鉄平は後期高齢者の一人である。保険料は、二カ月に一回支払われる年金から、天引きされるというのだから、小木曾鉄平は、頭にカチンときた。

特別養護老人ホームのような施設に入居してしまうと、もう親族でもなかなか面会にやってきてはくれない。

特に、西の舎のケースでは、介護員が十分な世話をしてくれるので、子どもであつても面会に行つてまで、手出しすることはない。と入居数年もすると、面会人の数は減少してしまう。

あの幸子でさえも、夢の中にも出て来てくれないのだ。あゝ、気の毒なのは、五十二歳で亡くなった幸子ではなく、特別養護老人ホームで暮らしている小木曾鉄平の方が今となつては、気の毒なのである――。

『ああ それなのに』怒るのは 怒るのは当たり前でしよう小木曾鉄平がいつものようにハーモニカを演奏していると、介護員が、面会人が来たことを告げにやって来た。

「お会いになりますか？ どうされますか？」というのだけれども、小木曾鉄平にとって久々の面会人なので「会う」との回答をすると、介護員が一組の夫婦を案内してきた。

それは、久しぶりを見る、息子の一平とその妻だった。

そう、数年前に「独居老人のマンション暮らしなんて、何が起ころか分かりやあしないから」と、

小木曾鉄平を特別養護老人ホーム西の舎に入居させてしまった、あの夫婦だった。

その一平夫婦がいったい何の目的で面会に来たのだろうか？ 小木曾鉄平が会つてみると一平は「幸マンション内のレストラン鉄平の評判は上上で繁盛している」ことを報告の後で「顔色がよくて元気そうじゃあないか？ この特別養護老人ホーム西の舎に入居させてもらえてよかつたじゃあないか！」と自分たちを納得させていた。

しばらく世間話をしたところで一平は「それじゃあ、また来るから」と小木曾鉄平の手に千円札を一枚握らせて、帰って行ってしまった。

「また来る」とは言つても次に面会に来る日時を告げて行かなかつた。

まあ、次回の面会日は一年先のことを考えることが妥当なところといえるのではないか？

ということはこの先、一年間、この千円札一枚だけでやってゆけ（生計を立てていけの意味）ということなのである。

驚くことに、小木曾鉄平が自由に使える年間予算は「一千円だけ」ということになる。

子どもが、お正月に手にする『お年玉』よりも、少ない金額しか、小木曾鉄平は、息子の一平夫婦から渡してはもらえなかつたのだ。

『子どもは、地域の宝だ』とか『将来を担う子どもは国の宝だ』と評される。

それでは、お年寄りには？ 特に後期高齢者と呼ばれることになつたお年寄りとは、いったい、社会の中でどのように位置づけようとされているのか？

一平夫婦が、父親の小木曾鉄平に別れ際に手渡した千円札が象徴しているではないか？
後期高齢者の存在価値は、年間の消費額千円に等いのである。

「お爺ちゃんお爺ちゃんいつまでも元気で長生きしてね！」などと口先では言っているのもその、
本音は年間千円でやってゆけ！ ということなのだ。それが、日本の福祉社会の現実というものだ。
だから『ああ それなのに』怒るのは、怒るのは、当ったり前でしょう——なのである。

これでは、五十二歳であの世に旅立って行ってしまった、幸子の方がどれだけ幸せだったことか？
『ああ それなのに』の小木曾鉄平の人生はまだこれからも続いてゆくのである。

一年に一回程度は、息子の一平が面会に来ては「元氣そうじゃあないか？ 安心したよ」と千円
札を手渡してゆくことだろう……。

特別養護老人ホーム西の舎には、小木曾鉄平の他にも、インドネシアで闘った旧大日本帝国軍人
がいる。

ここでは仮にAと呼んでおこう。インドネシアで闘った、とはいっても、所属部隊が違ったこと
から小木曾鉄平とAは現地で顔を会わせる機会はなかった。

ただし、Aは、小木曾鉄平とは違い、銃剣を所持し、現地兵との交戦に臨んだ経験を持つ。

ただし、現地軍と交戦はしても、Aが現地兵に発砲することはなかった。

その理由は、現地人は、大日本帝国軍人に対して「ようもまあ、これほど遠い所にまで来て大変

なことだわなあ！」と同情し、親切にされたことにより「このように親切だった現地兵に銃など向
けられるか！」との信条の一点にあった。

結局、現地兵を一人も殺害することなく終戦を迎えAは帰国することになった。

だが、どのようなルートで、いつ復員できたのか、今となっては不明である。

というのは、Aは最近になって認知症（いわゆるボケ）を患い、何事に対しても「弱よったなあ」
が口グセになってしまったからである。

しかし復員当初は元氣だった。発砲しないのだから、現地兵もAに発砲はせず、Aは傷い痕軍人に
はならず復員できたのだった。

しかもAの家は、大の資産家であり広大な山林ばかりか、田地、田畑を所有する大地主だった。
復員したAはその田畑を生活の糧として生かした。嫁も来て一人息子が誕生した。

典型的な農家としての基礎は確立できた。

しかしAも小木曾鉄平と同類で若くして妻と死に別れることとなった。

Aは男手だけで頑張った。

一人息子にだけは苦勞はかけまいと、都市部の高校、大学にも進級させた。

しかしその、一人息子が一人前になる頃にはA自身の体力が急速に衰えだしてきた。

そんな時もAは、「いずれは息子が家に戻って来て、跡を継いでくれる」と期待していた。

やがて、期待していた息子が若い女性を連れてAの実家に戻って来て「この女性と結婚したい」

と紹介した。

Aは、いよいよ来る時が来た、と早合点して、とりあえず母屋のリフォーム（改修）工事を始めた。もちろん「新婚夫婦を迎える」ためのリフォーム工事だった。

前途はバラ色に輝いていた、リフォーム（改修）工事だなどと言っていたのに、他の人から見れば「あれだけの工事だったら、改修ではなく建て替えてしまった方がよかつたのに！」と言われるほどの改修だった。それほどの改修工事をしていた時、見知らぬ若い女性がAを訪ねて来た。

話を聞いてみると、最近結婚をしてこの町に転居して来た新妻だという。その新妻がAに言うには「最近の食料品は信用できないものばかり。自分の手で作物を作れば、安全な食材が確保できる。だから、せめて自分たちで食べる物くらいは、自分の手で作りたい。Aさんの家には、畑地が沢山あると聞いたので、どうか私たちを助けてもらいたい」との訴えだった——。

Aはその新妻の訴を聞いていて「シメた」と思った。赤の他人の新妻があれほどまで農業に熱い視線を持つているのだったら、息子夫婦はきつと同じ気持ちであつて、農家としてこの家をキッチンと守つていつてくれることだろう！とAの夢はふくらむばかりといえた。

もちろん、新婚ホヤホヤの若妻には畑を賃貸する約束をしたAだった。畑は放置せずすむことであり、しかも、Aの元には毎月畑地使用料が入るので万万歳の状況だった。

Aの町内に、新婚さん夫婦が転居してきたことは、田舎いなかのことでもあり、すぐに評判となつた。

やがて、話題となつた新婚さん夫婦が運転する、白い軽トラックが、新婚さん家庭と、Aが賃貸した一枚の畑間を往復する光景が多くの人々の目にとまるようになる——。

「おい、どうも今度転入して来た若い夫婦は、どうも本気らしいぞ！」との声を呼ぶようになっていった。

「本気らしいぞ」というのは、Aの住む町内でも以前いん似たようなケースが数例あつたことによる。「休日菜園をしたいので畑を貸してほしい、などと当初は強引に申し出ておきながら、なかなか実績が上がらず『思うように作物が育たないから——』との理由で畑地賃借を中途解約して逃げ出す例があつたからだ。

それが、今度来た新婚夫婦に限つて中途放棄あきらの素振そぶが見られないことから「どうも本気になつて作物作りに取り組むらしい」というのだ。

Aは、そんな声を耳にする度に「よい夫婦に借りてもらえたなあ 畑もきつと喜んでいることだろう」と大いに満足したものだつた。

それに熱意のある、若い夫婦に畑一枚を貸したメリットは、賃貸料がキッチンと入ることの他にもあつた。

作物というものは、熱心に育てれば、作り手の期待にちかえてくれるもの、ということとは農業経験者なら全員が感じていることである。新婚夫婦は「自分たちで食べる物くらいは安全な作物を食べ

たい」との強い意志でもって栽培に取り組んだ。

その結果、作物がその期待に応えない訳がない。キュウリに、ジャガイモにと新婚夫婦は見事な農作物栽培に成功したのである。

そして「オジさん。こんなものができたよ」といつては、軽トラックで、Aの家にまで報告に来ては、おスソ分けしてくれるようになった。

Aは「おお、有難うさん。初めてにしては上出来ではないか？」と取りたての農作物を受け取る、しきりに目を細めた。

その時は、一人息子の嫁もあのようにして立派に農家を継いでくれることだろう——との淡い思いが重なっていた。事実そうなることを夢みていたAだった。

母屋の改修工事が終わる頃になると、その一人息子は、念願の女性と結婚した。

息子夫婦が家に戻って来ることを期待するばかりのAだった。

来た。息子から「近い内に家に帰って生活するので頼む」と連絡が来たのだ——。

バンザイ、バンザイと大声で叫びたいところだったが、一人息子の言う「近い内」ということは、実は一年先、つまり来年ということにAは落胆せざるを得なかった。

それでもAはよかった。「来年になれば、息子夫婦が帰ってきてくれる」との夢があったのだ。もちろん、転入して来た新婚夫婦のように熱心に農業に取り組んでくれることだろう、との期待を胸にしていた。

TVでは、中国製ギョウザに毒が入っていたとか、国産うなぎが、実は中国産うなぎだったなどと『食に対する不安』は極限に達していたので、息子夫婦は当然『食の不安を解消するため』に、自分たちで農業を継ぐものとはばかり思うAだったが——。

すぐに一年が経ち、約束どおり息子夫婦がAの元に帰って来てみると、嫁は「まあこんなに立派に改修してもらって、義父さんどうも有難う」と、母屋の改修を誉めてくれた。

その結果、「これだったら、キッチンも使い勝手がよくて安心だわー」と喜んだ一方で、「ところで、義父さんは、これからいつたいどうするの？」と初めてAの存在が気にかかるらしかった。

一人息子は「どうするって、そりゃあお前一人になった親なんか家に居いておくことはできません。老人ホームにでも行って暮らしてもらおう」と、嫁の顔を立てることで精一杯だった。

息子に農業を継いでもらうどころか、Aはこの家から出て行け！との宣告である。

よく出来た嫁といえるのだろうか？一人息子の嫁は、早速に民生児童委員の元に走り、相談を持ち込んだ。Aの老人ホーム入居の勝ち札を取り付けるためだった。

こうして、Aは、特別養護老人ホーム西の舎入居と相成ったのである。

ああ持つべきは、よく出来た息子かそれとも嫁なのか？

この時は、未だそれほど認知症（いわゆるボケ）は始まってはいないAだったが、この問題解決の糸口は見い出せないまま、特別養護老人ホーム西の舎に入居してみると——。

「私たちがこれからの生活のお世話を担当させていただきます」と頭を下げてやって来た女性を見

て、Aは、場違いなところに来てしまったのではないかと驚くのだった。

「世話をさせてもらいます」と言った女性は何と、わずか数年前に、Aのところに来て「畑を貸してほしい」と申し出たあの新婚さんだったのである——。

結婚当初から、この、特別養護老人ホーム西の舎で介護員として、日夜頑張っていたのだ。

過酷といえる、介護員としての勤務の合間を活用して「せめて自分たちの食べる物くらいは、安全なもの」とAの畑を賃借して、キュウリやジャガイモを栽培していたのである。

Aは、そうした労苦を重ねている、若妻に対して、全く頭が下がる思いだった。

それに引き換え、一人息子の嫁ときたら、母屋を改修してやったのに、義父さんは老人ホームで暮せ！だと、堂々と言いやがったではないか。

「これからの生活のお世話をさせていただきます」とまで言ってもらえた介護員は、

「あれッ、オジさんどうされたの？」

母屋を改修されたとお聞きしておりましたのに、息子さんは帰って来ては、もらえなかったのですか？」とげげんな表情で聞く。

そりゃあそうだろう。Aの町内では全員が息子夫婦が帰って来て、三人仲良く暮らしてゆく——ものとはかり信じられていたのである。

三人仲よく暮らすハズのAが、特別養護老人ホーム西の舎に入居するとは、介護員すら信じられない出来事だったのだ。

「何だ。畑を借りに来た若妻とは、この、特別養護老人ホーム西の舎の職員だったのか？」と判断するだけの能力を、この時までのAはまだ持っていた。しかし、判断できる能力を有するだけに、Aの心境は複雑だった。

Aは、特別養護老人ホーム西の舎への入居があまりにも、急だったために、小木曾鉄平のように、お寺に相談に行ったり、墓石を注文しておくだけの時間のゆとりがなかった。

それに、たとえ石材店に墓石は注文できても、死後の供養を「あの一人息子の嫁に託せる期待は持てなかった。

もともとA家の墓地は、家屋敷の近くにあり、先祖代々の墓と銘記の墓石がまつてあるので、Aもその墓に納めてもらえるだろうとの夢をもって、これでよしと入居したのである。Aだけまつてもらわなくともよいのだ。先祖代々の一員として、春秋の彼岸におまいりさえしてもらえたら十分と考えたのだ。その程度だったら、あの嫁でもしてくれるのではないかと。との期待もあった。

目覚まし時計も持たずに特別養護老人ホーム西の舎に入居したAだったが、朝の起床、夜の就寝はキチンとした。

Aが、特別養護老人ホーム西の舎に入居したことを知った町内の有志が面会に度々やって来てくれるのだった。

Aは、面会人に囲まれて、「若い夫婦が畑を一生懸命になって耕作しているぞ」などと伝えられると喜んだ——。

しかし、中にはよくない知らせがあった。

お寺さんの屋根が痛んだので、檀家でお布施を出して補修することになった。そのお布施の金額が檀家総代で決定し、通知されてきた。

「うちでは五〇万円だ」という面会者がある一方で「うちはもつと高くて八〇万円だ」と聞いてビックリした瞬間――。

「お前さんはまだいい。うちじゃあ百万円出せとのことだ！」と泣き出しそうな声を聞いたAは、「そもそもお布施とは、自分たちで出せる金額の範囲内で出せばよいのであって寺側の都合で金額まで決めるものではない」と怒りたい心境だったが、Aの家にも、数十万円の割当があったであろうことを想像すると、「そのくらいはあの嫁に出させてやったらどうだろう――」と思ってみると「痛快」な気持ちとなり、

「まあ、寺側にも色々都合があることだろうから、仕方がないわなあ！ それに「あそこ」は非常に大事なところだから」と怒ることは中止にした。

たとえば、檀家総代の決定であつてもAさんだったら、何とかしてくれることだろうと期待していた面会人は、アテ外れとなつてしまい、「そんなところ（特別養護老人ホーム西の舎のこと）になど来るんじゃあなかつたなあ」と肩を落して、帰ってしまった。

「面会人してみれば『困ったことになつてしまったなあ』という訳である。

この地方では、困ったことを……『よわつたなあ』と言う方言が今も残っている。

特別養護老人ホーム西の舎で、Aが日常茶飯事に「よわつたなあ！」と口にするようになったのは、その直後からのことである。

果してAは、いったい何に対して「よわつて」いるのか？ 面会人が指摘していたとお礼お布施の金額があまりにも高額すぎて「よわつて」いるのか――。

それとも、お布施そのものが集まつていない、ような気がして「よわつて」いるのか？

または、気丈な嫁がエイツとばかりにその高額なお布施をポンと払ってしまったので、痛快さが吹っ飛んでしまい「よわつて」いるというのだろうか。

その原因が分からないことには、担当の介護員として失格であり、介護員の方も「よわつたなあ」ということになる。

標準語的に表現すると、介護員も『困つたなあ』ということになるのだが……。

Aは「よわつたなあ」を口にする一方で、寺院の屋根が痛んでしまったことを指して「あそこは大事なところだから……」としきりと話すようになった。

ことによるとAは、もうボチボチお寺さんの世話にならんといかんなあ――とでも感じるようになったのだろうか。お寺を大事なところだなんて――。

お寺さんが、大切なところであるのか、どうであるのか？ はともかくとして、特別養護老人ホーム西の舎入居時の、Aはまだしっかりとしていた。西の舎で定期的に開かれるボランティアによる朗読の会などには、自主的に参加して、積極的に知識を得ようとする、気力にも満ちていた。

コーヒー好きのAは、ボランティアによって開店する喫茶コーナーにも欠かさずに顔を出しては「美味しい。美味しい」と言ってはボランティアを喜ばせていた。

そして収穫期になれば「おじさん。こんなに見事なトマトができたよ」とか「ことは成り年なんだねえ。キュウリがたくさん成ったよ」と言っては、例の若い介護員が、せつせと、特別養護老人ホーム西の舎に届けてくれた。

Aの不動産の一切はもう息子夫婦に渡してしまっていたので、畑地の賃貸契約も、頼りにしていた一人息子がAに替わってしているのだろう。それでも賃貸した畑地から得られた農作物の一部は、せつせとAの元に届けられていたのである。

「よく働いて他人に施しをせよ」とも人生訓は教えている。

施しをしておけば、やがてはそれが自分の手元に帰って来ることを教示した人生訓であるのだが、特別養護老人ホーム西の舎の同居者となったAには、今その施しが次々と帰ってくるのだった。

その時は、たとえ本人は気付いていなくとも、いったん施しておいた分は、人生の後半、つまり、老後において、必ずや、自分の手元に帰って来るものなのだ。

ところが、施し分が帰ってきたとしても特別養護老人ホーム西の舎での生活は単調の連続であって、Aは次第に生きる力を失いつつあった。

いつの間にかやらトマトやキュウリが届いても、どうして、どこから、そうした新鮮な農作物が届くのか、自分では分からなくなりだした――。

いわゆる、認知症（ボケ＝痴呆）の始まりだった。いつしかボランティアの朗読会に顔を出さなくなった。喫茶に出掛けて、同じ同居者と談笑する機会も減った。

「これはおかしい」と介護員が言うので、主治医の往診を受けてみたものの、「現状では、たとえ入院しても、認知症の改善策とか特効薬が、ないので入院は無理。しばらくは様子をみましょう」との結論となり、Aは認知症を抱えたまま、特別養護老人ホーム西の舎で生活することになった。

午前と午後のおやつタイムには、食堂でコーヒーを味わう――。

「美味しい！」と言っていたAはその間に、コーヒーを味わうことなく、コーヒーカップの上に頭を乗せて休憩することが目立ち出してきた。

「Aさんの様子が少しおかしい」と聞いた村の同級生四、五人がそろってAのところに面会を求めて来た。

同級生に囲まれたAは、その時はニッコリしながら、同級生の話を聞いていた。

「昔は、夏になると川でよく遊んだなあ」とか「メジロを捕まえるのが、クラスの中で一番上手だったじゃあないか？」などと同級生はにぎやかに話すと「それじゃあ、また来るから、達者でおれや。西の舎は特別養護老人ホームの中でも特に施設がよいから、田舎なんかで生活するよりは、ズ〜とズ〜といいわあ。皆と仲良くして長生きするんだゾ」とAに言っただろって、帰って行った。

Aに代わって、介護員が「今日はどうもありがとうございました」とお礼を述べた。

その足で、介護員が、Aの元に引き帰り、「Aさん。今日はよかったねえ、大勢の同級生に来て

もらえてよかったじゃあないの」と言うと、AはふだんのAの表情に戻り、「いいや、今日は誰れも来てはおらん、誰れにも会ってはおらん」の一点張り、再び食堂のコーヒークップと面会。

顔を乗せてしまつてゴメンネといった姿勢でもう動こうとはしない。

主治医が呼ばれたものの、認知症に対するこれといった改善策の見当たらない今日では「もうしばらく観察をしていきましょう」というだけで、入院のために、Aを病院に連れて行くことは、なかった――。

Aが、あそこは大切なところと言つていたお寺さんの屋根改修が終わると。

近在の子を集めて、稚児行列が行われた。参加者が少なかったので「あまり早く歩かないように」指示があり道中、保護者や祖父母は、稚児の晴れ姿を撮す時間がタップリあり評判が実によかったとか。以前の稚児行列は参加者が多く「早く歩け、早く歩け」とせかされるばかりで、聖火リレーのようなもので、稚児は、アツと言う間に目の前を通り過ぎてしまい、あまり評判はよくなかった。「子どもの人数が少ないのは悲しいけれども、行事を催すには最高だなあ！」などと、またまた村の同級生が連れだつて、Aに面会に来た時には、Aはもう面会そのものをうつつとうしく思うようになり、なつかしい同級生でさえ会おうとはしなかった。

朝起きて、朝食のために食堂に向かうと、しきりと「よわつたなあ」とか「痛いなあ」を繰り返すことになった。

看護師が「そんなに痛くつちやあ気の毒だのん。ひとつ先生に診てもらかん。どうする」と心

配すると。

Aは「よわつたなあ」を連発するばかり。フロア担当の看護師はそれでも「そんなに痛くては、先生に診てもらわんとねえ」と言つても、Aは「よわつたなあ」「よわつたなあ」と言つては目を細めるばかり――。まだ相当に眠たいAなのであった。

本場に「よわつた」看護師は、ただ一人Aにかかわっている訳にもゆかず次の入居者の体調を診りに行つてしまう。

それでもAの「よわつたなあ」は続く。

改修された山寺に早く行けんの、「よわつたなあ」なのか？ 山寺の客となるまでAの特別養護老人ホーム西の舎での生活は続くのである――。一人息子夫婦は面会に一度たりとも来てはくれない。「よわつたなあ」をもう聞いてもらえない人はいないのである。

もしも、認知症をランク別に区分する、尺度があるとしたなら、特別養護老人ホーム西の舎には、Aよりもはるかに認知度の高い重症患者のBが入居している。

一般には、それほど認知度が進行しているのだつたら、特別養護老人ホームなどではなく、医療施設の整つた、近代的な総合病院にでも入院、治療を受けた方がよいのではないかと考える方が多からう。

しかし、医療の進んだ今日であっても、認知症に対する特効薬はなく、認知症改善策は存在しないのである。

だから、中にもボケ外来などの診療科目を掲げている総合病院はあっても、なかなか入院まではさせてはもらえないのが現状である。

だから認知症を発病してしまったBは、総合病院には入院させてはもらえず、かといって、在宅介護のままでは、あまりにも家族の負担が重すぎることから、民生児童委員はじめ、地区担当のケアマネジャーが協議の末、特別養護老人ホーム西の舎への入居申し込みとなった。

しかし、制度上、この特別養護老人ホーム西の舎ですら、申し込んだら即入居できるといったシステムではないのだ。

何しろ、特別養護老人ホームの施設数そのものがまだ少なく、絶対数が不足しているのである。なのに入居申し込み者は数多い。

西の舎の場合、常時七百人から八百人が入居待ちの待機中とのことだ。

新たな入居申し込み者が出ると、まず、入居のための審査会が召集される。

施設長はじめ、生活相談員などからなる審査会で、入居OKの判定が出なければならぬ。

Bの場合、家族介護には限界があるとの意見が重要視された結果、入居OKの判定が出た。

この時、認知症のBにはサツパリ見当がつかなかったものの、Bの家族は大喜びだった。

「特別養護老人ホーム西の舎にお父さんが入れてもらえたら、家の者は介護をしなくてすむ。全員がどこか、好きな所に働きに行くことができる」と喜んだのだった。

こうしてBは、家族全員に祝福させて、特別養護老人ホーム西の舎の入居者となったのだった。

ところがBが、特別養護老人ホーム西の舎に入居したものの、Bの認知症はかなり進行してしまっていて、言葉をも、失念してしまっていた。

誰れかに話しかけようにも言葉にならないのである。それでも、若い頃にはかなり立派だったのだろう。今もって頭の中には「俺は村中で一番の美男子」のイメージが残っているらしい。

そこにゆくと、入居した特別養護老人ホーム西の舎ときたら、爺ばかりではないか？

Bは、ろれつの回らない言葉で「お前なんか馬鹿だろう」。そこに行くところの俺なんかどうだ、美男子だろう？ と施設内の食堂などに備え付けの鏡の前に立つて、せつせと顔や頭をなで回してみせる。

廊下で、他の入居者と会えば「お前なんかなんだ。馬鹿だなあ。話にも何にもならんと薄気味の悪い言葉を残して、またどこえやらヒョッコ、ヒョッコと行ってしまふ。

特別養護老人ホーム西の舎の介護員が家族に代わって面倒をすることになった訳だけれども、Bにはさすがに手を煩わしてはいたものの「あれは、入居者のBさんが悪いのじゃあない。病気があのようにさせているのだから」とせつせと介護に努めている……。

「本人が悪いのではなく病気がそうさせているのだ」とは、何とスゴイ言葉でありませんか。『平成の名言』と言っても過言ではないでしょう？

しかし、いくら『平成の名言』ではあっても、相手に「お前なんか馬鹿だなあ！」と言ったのであつては、仲間などできる理由はない。

一日三度の食事の時間になって、Bが食堂に行ってみると――。

どのテーブルの利用者からも「お前なんかこっちに来るな。あっちの方に行つてしまえ」と仲間に入れてはもらえない。

結局Bは、どのテーブルも使わせてはもらえずじまい。あちらのテーブルに行つては「お前なんか何だあ。お前は馬鹿だ！」をやっているものだから、どのテーブルからもハジキ出されてしまう結果となつたのだ。

仕方ないので廊下のソファアに腰を落ち着かせてはみたものの、Bは相変わらず「お前らは何だ」。皆馬鹿な爺婆ばかりだなあ！」の一点張りなのである。

皆は、食堂のテーブルで静かに食事をとる。なのにBだけは、廊下のソファアに腰をかけたまま、食事を待つ！

やつとのもので、ソファアのBの前にまで一人前のトレイに載せた食事が運ばれてくると、Bの食事である。

特別養護老人ホーム西の舎にあつて認知症のBは、完全に孤食こしょくなのだ。

孤食こしょくではあつても食事メニューは他の入居者と全く同一の食事がBにも「与えられる」

やつとのもので食事となつたBは、それを「こりゃあ 美味しいわあ！」「こりゃあ 美味しいわあ！」
と言つては欠食児童のようになって、食べ物を口に運ぶBだった。

特別養護老人ホームのような施設には、管理栄養士が配置されていて、栄養価などをキッチンと計

算して、調理に当たっている。

とはいえ、入居者一人当たりに使える予算額には上限があつて、管理栄養士が、いくら入居者に満足のいく食事を提供したい！と考へてはいても、満足のいく食事など、なかなか提供できないのが、特別養護老人ホームで働く、管理栄養士の最大の悩みなのだ！

「あ、もう少いでよいから、食事の上限金額を使えるようにしてもらえたら爺ちゃん、婆ちゃんに、もつと喜んでもらえる食事を作ることができただけどなく、食事の金額が頭打ち、つまり上限額が線引きされてしまつていては、現場の管理栄養士一人の力では、どうすることもできない、というのが悲しいことに現状なのである。

それをただ一人、孤食のBだけが「美味しいわあ！こりゃ美味しいわあ！」と言つては欠食児童となつてパクつく姿は、あゝこれが日本の社会保障の姿なのか？と悲しくなるばかりといえよう。認知症のBが「美味しいわあ！こりゃあ美味しいわあ」と食事をする度に、日本の社会保障のレベル水準は、低下の一途をたどつてゆくのだといえよう――。

特別養護老人ホーム西の舎の食事を、まるでベルサイユの宮殿での食事にでも招待されたような気分になつて「美味しいわあ！美味しいわあ」と連発するBとは、いったい家でどのような食事をしていたのだろうか？ 認知症を発症するまでは、一家の大黒柱として君臨していたであろうB。

大黒柱ではあつても、あまり上等な食事を食べさせてはもらえなかつたことだろう……。

だから家族内でもいつしか孤食が強いられ、その結果として「認知症が発症してしまった」のではないだろうか？

Bの認知症は、誰れでもない、家族が作り出してしまった、おそれが十分に考えられる。認知症が発症してしまえば、もう一家の大黒柱でもない。ただ家族の手をかけねばならない厄介者ぢがいのものでしかないといえる。

家族の厄介者となったBは、特別養護老人ホーム西の舎の入居者となり、さして上等でもない食事を今日も「美味いわあ！こりゃあ美味いわあ！」と一人パクついて一日を終るのである――。

食事が終われば、かつての美男子のことである、食堂に備付けられている共用の鏡の前に立って一人ニヤニヤ、「ウーン。どこから見えてもイイ男だなあ」と頭から、顔をなで回してござる。

そして、誰れかが廊下を通行していると「お前は、馬鹿だなあ！この俺と比較になんかならんわ、お前は馬鹿だなあ！」と訳のわからぬ声で呼びかける。認知症患者は頭は正常ではないのだから、「お前は馬鹿だ！」などと言われたところで、腹を立ててはいけけない。何しろ本人が言っているのではなく、あくまでも『病気が言わせている』のだから――。このように病気とは、一家の大黒柱の座をも奪うばってしまうものなのである。

さて、さて、認知症のBが供用鏡の前で身だしなみを整えている間は、まだ問題はない。

「今日はどこかに、お出掛けでもする予定のある日は、身だしなみも念入りになくってはならない」という訳で、個室の鏡を使って身だしなみをグレードアップしよう！などと考えだすとトンデモ

ない行動に出してしまう。

ここ特別養護老人ホーム西の舎では、入居者のプライバシー保護のために完全個室制となっている。

Bが自身の個室に帰って行くのだったら何もトラブルは発生しない。

個室はドアを開閉で出入りできる。外観はどの個室も、実にそっくりなのだ。

認知症のBは、その個室の判別区別がよくつかない。ついつい他人の個室ドアを開けて勝手に入室してしまう。そして洗面台の前に立つと、「どこから見てもイイ男が立っている」姿を確認しては「おお、これはイイ男だこの男こそ日本一だ」と自分を誉ほめたたえる。

そこに個室の入居者が帰って来ると、Bは、「お前は馬鹿だなあ！」と一家の大黒柱であるような主張を展開する。しかし、怒ってはいけけない。怒ってはいけけない。Bが言っているのではなく、あくまでも認知症という病気が言わせているのだから。怒ったり叱ったりしちやあダメだよ、とは特別養護老人ホーム西の舎のフロアリーダーの弁である。

やがて、Bの姿が確認できないことに気付いた、当直の介護員が、他人の個室に、不法侵入しているBを発見、「ここはBさんの部屋じゃあないから」と連れ出したところで、ハイ一件落着。

介護員とは、平成の遠山金四郎守でもあるのです。「それにしてもチト待遇が悪いのお、もう少し金員を出すようにしてはいただけませんか？施設長殿、そして内閣総理大臣様、どうかよろしくお願いをいたします。

さてきて、この時は当直介護員によってBが連れ出されたからよかつたようなもの。時には、いつまでも発見されずに、Bが他人の個室に不法侵入したままのケースがある。洗面台でいくら身づくろいをして、どうも上手くいかない。「これはこの部屋に欠陥けつかんがあるのではないか？」と判断したBは、洗面台の蛇口に手をかけると、エイッと蛇口ごとBはひねり回してしまうのだった。洗面台に固定された蛇口は堅ろうな作りである。それをBは、もの見事にひねり回してしまったのだ。つまり認知症になっているとはいえ、Bは誰れにも負けない怪力の持ち主なのであった。もし、もしも、もう少しBの年齢が若かつたのなら、各界入りでもして、朝青龍関の横綱昇進の大きな壁かべとなっていたことであろう。エヘラエヘラしているBとは、それほどまでの怪力の持ち主であるのだ。ただ残念なことは、Bが人生中途にして認知症となってしまった、ということなのである。

認知症のBは、特別養護老人ホーム西の舎で他人の個室に不法侵入して水道の蛇口を壊してしまえばかりではなく、時には室内の家具の配置レイアウトも自分流に手直ししてしまう。

つまり、ベッドとか、テレビの配置場所を変えてしまうのである――。

特別養護老人ホーム西の舎の場合、目の不自由な入居者が数人いる。

視力の悪い入居者は、ドアを開いて、数本歩いた先の右手にベッドがある、などと覚えて、日常生活を送っている。Bが勝手にベッドの位置を変えてしまう、ということは、いたって危険な行為なのである。三度の食事をパクついて食べる認知症のBは、家だけでなく、ここ特別養護老人

ホーム西の舎でも厄介者扱かいのだ。

といったところでBには他に行つて生活をする場のアテはない！

と、いつて、もう認知症（いわゆる痴呆痴呆Ⅱボケ）の始まつたBには、家族介護は、とても無理。という訳で、最終的に特別養護老人ホーム西の舎しか生活の場は無い、ということになり、西の舎でBの面倒めんどうをする結果となつたのである。

特別養護老人ホームⅡ通称特養・西の舎でのBの生活は正にどん底とも言える状態が続くことになつた。

たとえ認知症を患らつていようと『夜』はやつてくる。

一人、Bに与えられた個室の中で休んでいてくれれば問題にはならないものの、「家では必ず二人で眠つていた」との理由から、Bは一人では眠られぬ、と主張するのである。

当直の介護員に「どうだ。一緒になつてベッドの中で休んでくれ」と依頼はしても、たつた一人勤務の男性介護員であつても「俺にはそんな趣味はない！」とBの依頼を断わらざるを得ない。

当直介護員が女性の場合には、問題はいつそう深刻といえる。「そんなことをしたらお嫁に行けなくなつちゃう」というのだ――。

一人ぼつちのBは仕方ないので個室から抜け出して、夜の廊下を散歩する。

それも、手拍子をとりながら、歌を唱つたり、「お前らは馬鹿かあ？そこへゆくよこの俺なんか、なんといい男なんだろう？」と意味のよく分からない一人言を言いながらの散歩である。

「そんなことをしていたのじゃあ他の入居者の就寝の支障になりはしないだろうか？」と考えられる方が多かろう――。

しかし、そこは特養西の舎のことなので、入居者の多くは難聴障害を持っているので、夜の一人歩きをするBへの苦情は少ない。

それでも、深夜のはいかいはよくないので当直介護員が発見すると、Bは個室に連れ戻される――。部屋に入れば、Bはまたまた「一緒に寝てゆけ」なので、当直介護員は、早々に引き揚げてゆく、Bはいつの間にかやら、また散歩を再開してしまう。

夜明けまで、Bと当直介護員のイタチごっこは繰り返される。これが、日本の特別養護老人ホームの実態といえる。

Bは一向に気にはしていないのに、当直介護員が「今朝は眠たいわねえ！」と訴えるのは、Bの活動が活発だった朝の光景である。

そんなBではあっても、家族からすればかけがえのない人といえる。一カ月に面会に来る家族の回数がトップクラスのBなのだ。

家族は、面会にやつて来ると必ず、Bを散歩に連れ出し、介護員に対しても「人間の衰えは足からくるので、できるだけ散歩をさせてもらいたい」と注文をつけてゆくのだからBの足は、加齢とともに丈夫になってゆく。

特養西の舎の入居者Bの体力は、日本の医療界の常識をもくつがえす存在となりつつある。

認知症の方はどんどん進行してゆくのに、体力的には衰えを知らない。深夜のはいかいはこのころ活発化しつつある。

認知症患者としては、特養西の舎にはBよりもさらに上に行くCが入居している。

もう認知症がかなり進行しているので、Cの履歴の多くは、不明だが、壮年期には県職員として、活躍したらしい。

県土木部役人として、県下の地方事務所を訪問した例が多く、各地で、TVDドラマ水戸黄門風に甘い汁を吸っての生活をしてきたとの由である。

県土木部の在任期間が長期に及んだことから、地方公務員共済（いわゆる恩給）が受けられ、それを原資に、特養西の舎に入居したのだという。

入居してしまえば、役人であろうと、個人経営者であろうと、そんな古いことはどうでもよく、同じ特別養護老人ホーム西の舎の入居者として同一の待遇となる。

認知症のCも、朝になれば起床し食堂に行つて、朝食を待つ。朝食が終わると、個室に戻つて一旦休むのだが、Cの場合はここで問題が発生する。

自分に貸与されている個室が自分では判明しないのである。

どの個室も、入り口ドアは閉じられており、同じに見えてしまい「自分の個室がどこであったのか？」判別不可能なのだ。

それでも、Cは何とかひと休みしたい、ので、誰れの個室か分からないまま、個室に侵入してし

まう。

個室には、これまた同じようなベッドが用意されているので、ハイ、そのベッドの中にもぐり込んでしばしのご休憩をするCなのである。

そこへ、個室の正規の入居者Ⅱ住人が戻って来るとトラブルが発生するのである。

「知らない爺じい^{じい}が、私のベッドに入っている」と、騒ぎとなるのである。

知らせで、日勤の介護員や、パートさんの介護員がかけつけ、「Cさん。他人の部屋に入っちゃあダメじゃあない！」とやつとのことでCを自分の個室まで連れ出して行く。

「あれは、私の部屋じゃあなかったのですか？」とCは不法侵入を否定したかと思えば「どうも殺風景で、持ち物が少ない感じがしたなあ！」と言う。

しかし、持ち物が少ないと感じている間はまだいいのである。

たとえ他人様の部屋であろうと「ちよつといい物」があると「うんこりゃあいい。これはいい！」と持ち出してしまふ。

そして、どこに行くのかといえば、ちゃんと自分の部屋に戻って行くのである――。

つまり、特養西の舎の入居者Cは、窃盗の常習者であり、ふだんは部屋の識別が出来ないのに、窃盗をした時に限って、自室をキッチンと思いつける、というまことに便利な頭の持ち主なのだ。

だからこそ、自宅での生活はとて無理、近所の家に侵入しては、いい物を見つけ出して家に持ち帰ってしまう――。

時には、新婚さんのスイートルームに忍び込んで、ベッドで高いびきをかかほど眠られたら家人はたまらないことだろう。

「どこか面倒をみてくれる施設はないだろうか？」と捜していたら、あった、あった。

最近、特別養護老人ホーム西の舎が出来たというのじゃあないか！ 西の舎に申し込んだらどうだろうか？ と家人や民生児童委員の協議の末、西の舎への入居が決まり、住人となったのである。

九十の峠を越えたCではあるが、起きている間は役人根性から抜け切れず、カーテンを閉めて回る習性を持つ。

それを廊下など、共有部分のカーテンを閉めて回るのがあったらトラブルは無いものの、例によって、他人の個室に侵入してまでカーテンを閉めて回る。もちろん適当ないい物件があれば、それはちようだいをして回るのだから、Cの日常ではトラブルは絶えない。

県土木部の役人だったとはいえ、この爺さんCは、どうやら部長とか、課長経験者ではなく、いつも下働きをさせられていた平職員だったのではないか？

だから、毎日、カーテンを閉めて回っているのだ。これは終生、平職員について回る悲しい習性といえるのだ。

やはり同じ県職員であっても、局長や部長など上司と呼ばれる立場でないといけない。

平社員のまま、定年を迎えると、もし特養に入居できて下働きの生活をしなくてはならないからだ。これは特養だけではない、ことによると、あの世とやらに行ったとしても平職員の下働きは

続くことになるのかもしれない。ああ悲しいかな認知症のC。

しかし、悲しかりうと、悲しくなんかなくとも、近所のことを考えたら、もう自宅になど帰っての生活のできないCとしては、特別養護老人ホーム西の舎以外の生活は考えられないのである。ただこの認知症の入居者Cは、どこにでも、そして何にでも顔を出したが、という別の顔も有している。

今日は喫茶店がある、という日には定刻になると必ず顔を出し、「やあやあ皆さんお元気で！」と客の挨拶回りをする。果たせるかな相手が誰れであるのか識別出来ているのか？ どうかはCのみぞ知るところであるものの「やあやあ皆さんお元気で！」と本人は意にしない。

カラオケ大会があると聞けば、会場に一番乗りするのもCである。そして早くも『骨まで愛して欲しいのよ』と一人カラオケに興じるC――。

特別養護老人ホームでは生活にアクセントをつけよう、と時節に合った企画が実施される。

Cが入居の特養西の舎では立春になると世間並みに「豆まき」が催される。

「鬼は外！」と大声で鬼退治をする企画なんだけれども、Cが参加したからといって、他の入居者までもが「それでは私もひとつ鬼退治を」などと介護員に奨められて安易に参加してしまつてはいない。

Cが豆まき会場に居る間とはも角、「それではポチポチカーテンでも閉めなくては」と廊下や各個室の巡回を始める頃には、入居者は部屋に居ないと、Cに不法侵入された上にもし、貴重品でも

あれば、窃盗されかねないのである。入居者からすればCとは、窃盗の容疑者でもあり、立春の立役者『鬼』そのものとも言えるのである。

豆まきとは、Cの個室でこそ盛大に行ってもらいたい行事なのだ。

ということ、特別養護老人ホーム西の舎の入居者は、実にバラエティに富んでいる。

そうした、多種多様な人たちが、全国の特別養護老人ホームと呼ばれる施設に集まり、平成の長屋の住人となって暮らしているのだ。

表題の『長生きなんて するもんじゃあないゾン』とは、明治生まれで、一世紀余を生きて、この世を去った一人のお婆ちゃんの口ぐせだった。

一世紀余を生き抜いたとはいえ、晩年まで近くのデイサービスセンターに通うほど気力というのか好奇心旺盛なスーパー婆ちゃんの口ぐせだったのだ。

デイサービスセンターには、連日のように全国各地から見学者があり、職員が必ずこのスーパー婆ちゃんを見学者に紹介していた。

見学者は「どのようにしたら百歳もの長生きができるんですか？」と問うと、一世紀余を生きた、スーパー婆ちゃんの口から出る言葉が『長生きなんて するもんじゃあないゾン』だったのである。見学者の皆さん、期待に応えられなくてすみません、スーパー婆ちゃんに替っておわび申し上げます。

ではなぜ、見事なまでに一世紀余を生き抜いたスーパー婆ちゃんは『長生きなんてするもんじゃあないゾン』と応えられたのでしょうか？ その理由は――。

「長生きをすると、楽しいことよりも悲しいことの方が多すぎる」からだそうです。

悲しいことの多かったスーパー婆ちゃんでしたが、デイサービスセンターで、車イスに乗ってヒザにでも手を当てる利用者を見かけると「どうしたん 痛むかん？」と身内でもない他人の身体のことまで心配をしておられた。おそらく、身体の各部位の痛いことを経験してこられたのだろう。だからこそ赤の他人であっても「どうしたん 痛むかん？」なのである。

デイサービスセンターでは専任の管理栄養士が「少しでも季節感のあるものを」と智慧を出して毎日の献立を考えている。

ある年の初夏にはデザートにメロンがついた。デイサービスセンター最高のデザートだった。

「うんこれは美味しい」と言うスーパー婆ちゃんには気品きひんがあった。

すかさず「初物を口にするに十年は寿命が伸びるそうですよ」と言う――。

「あらま どうしましょう」と困惑気味だった。ひょうきんなところものぞかせるスーパー婆ちゃんだったので、一世紀余なんといわずに、どんどん長生きして、毎年名言を聞かせてもらいたい。少なくとも『大還暦』までは達者でいてもらいたいと多くの利用者が願っていたのに、一人旅立つて行ってしまわれた。世に言う大往生だった。ああ合掌。

ところで、本文で述べた小木曾幸子が入院したような総合病院には『救命救急センター』が併設され、緊急時の患者が救急車で運び込まれているが、その実態をご存知だろうか？

貴方がもし、救急車で搬送されたとしても、即入院治療してもらえらるとは限らない。

「救命救急センター」の多くが医師がいないとかベッドに余裕がないとの理由から、患者の入院を、その場で断わってしまうケースが続出しているのである。

もし、運よく当直医がいて、ベッドに空きのあった場合に限って「それでは救急車から降ろして、入院治療を！」と救急車で搬送された効果があったとしても、診断の医師が「これではたとえ一命はとりとめても、社会復帰は困難だろうなあ」と診断を下すと、早速、患者の家族に召集がかかる。「さあどうされますか？ 家族で患者さんの生涯を支えてゆくことができますか？」と問いかけられる。

家族の中の一人が「そいつは無理だなあ」と口にすると――。

担当の医師は「それではこれにて生命の維持を中断致します」と次の行為に移る。

「ご臨終です。まことに残念ですがたつた今、患者さんは旅立たれました」と告げる。

すると今度は看護師が「どこかお知り合いの葬儀社がございますか？ もしないのでしたら、医療機関として、どこの葬儀社がよいなどと指定はできませんが。出入りしている葬儀社のパンフレットがございますので、どうかこの中から、どこがよいかお選びになってご家族様で連絡をしてみてください」と、天国への扉を開く。

用意周到なものでそこには、数十社もの葬儀社のパンフレットが用意されていて、電話をすると、二十四時間体制で待機している葬儀社から担当者がかけてきて、段取りよく、あの世へのセレモニーを進行させてくれる。ハイ、発射オーライ――。

というように、説明すれば、お分かりいただけただけのように、現代の総合病院に併設の救命救急センターとは、貴方の大切な、生命を守る機関ではなく、貴方を墓場に送り込む機関と化してしまっているのである。

これは、最近問題となっている後期高齢者だけではない、広く全国民の問題として早急解決が迫られている話題のひとつだ。

とにかく、事故や病気になっても、救命救急センターには搬送されない方がよい。

いったん、救命救急センターに収容されてしまえば、「明日からリハビリを開始しましょう」と期待こそもたせられても、即墓場へ御案内、となり、生還できるケースは少ないからだ。

著者も現在、ある特別養護老人ホームの入居待機中の一人なのである。

入居待機中の特別養護老人ホームにある年の年末、一人の婆ちゃんがショートステイで入所された。百二歳になるお婆ちゃんだったので、介護員が気を効かせて、事前に全員に対して「今度来られる方は百二歳になられるので大切にしておいてね！」と依頼して回った。

『長生きなんて、するもんじゃあないゾン』が口ぐせだったスーパー婆ちゃんには及ばないとしても、百二歳とは尊敬に値するので、「どのような、お婆ちゃんなんだろう？」と注目していたら、長男の付添で入所してこられた。

村一番のやり手（実力者）とまでいわれていた長男の母親だったのだ。

そこで敬愛の念を込めて、付添いの長男に「百二歳にもなられるのだそうですね」と尋ねてみた

ところ――。

その実力者の長男は『おお、困ったもんだわ』のひと言だった。

このように、母親が長生きをしてくれるということは、地域にとつて自慢ではあっても家族にしてみれば『困ったこと』としか言いようがないのである。

天国に行かれた、あのスーパーパー婆ちゃんからすれば『そら、みたことか！ 長生きなんてするもんじゃあないゾン』と一喝いっかつされそうな今日である。

しかし、各地の総合病院で救命救急センターが活動している間は、もう長生きなんてできませんから、安心をしていてください。

最後に『牟呂むろ用水浴い』に、大衆食堂『日赤保健食堂』がありましたので、その経営者黒田夫妻を、小木曾鉄平・幸子のモデルとさせていただきました。

『日赤保健食堂』などと呼号すれば、何やら日本赤十字社の経営か？ と思われるかもしれませんが、日本赤十字社とは無関係だったようです。ありがとうございます。

著者